



2025年度 拠点事業年次報告書

熊本大学 半導体・デジタル研究教育機構
教授システム学教育実践力開発拠点

〒860-8555

熊本県熊本市中央区黒髪2丁目39番1号

電話：096-342-2895

ウェブサイト：<https://www.gsis.kumamoto-u.ac.jp/sharing-hub/>

目次

目次	1
教育関係共同利用拠点の7つの取り組み	2
共同利用拠点事業①	3
共同利用拠点事業②	26
共同利用拠点事業③	32
共同利用拠点事業④	35
共同利用拠点事業⑤	47
共同利用拠点事業⑥	64
共同利用拠点事業⑦	70

教育関係共同利用拠点の7つの取り組み

本拠点は、教育関係共同利用拠点として認定されています。

拠点名称：教授システム学に基づく大学教員の教育実践力開発拠点
共同利用分野：大学の職員（教員を含む）の組織的な研修等の実施機関
期間：令和5年度から7年度

教育関係共同利用拠点として、教授する力のうちの授業実践力（デリバリ）に対するノウハウを身に付けることに留まらず、デリバリの基盤となる授業設計力（デザイン）あるいはカリキュラム設計力を身に付けるための授業設計、教育評価、授業改善のための分析手法、改善手法等を体系化したオンライン教材、ワークショップ等の開発・提供といった活動を行っています。

延長が認められた令和3年度以降は、新たにFD担当者向け履修証明プログラム、LTテクノロジーを学習するワークショップ等を追加した上で、7つの取組として提供しています。

<7つの取り組み>

1. インストラクショナル・デザイン公開講座
2. 「IDポータル」による情報提供並びに支援ツール・実力診断
3. 「教授システム学専攻公開科目」による学修機会の提供
4. FD研修講師・大学教育設計コンサルタント派遣
5. 大学教員志望者のための教え方講座（教育改善スキル修得オンラインプログラム）
6. FD担当教職員向け「FD活動デザイン講座」
7. ポストコロナの教育とFDを強化するテクノロジー活用セミナーパッケージ

上記7つの取り組みは、本拠点内の各部門が協力し、運営しています。

共同利用拠点事業① 公開講座

本センターでは、インストラクショナル・デザインに関する
公開講座を各地で開催しています。



図：インストラクショナルデザイン公開講座ウェブページ

人文・社会 / 教育学

2025年度 熊本大学GSIS公開講座 募集開始！（オンライン／現地開催）

戸田 真志
 鈴木 克明
 喜多 敏博
 合田 美子
 川越 明日香
 天野 慧
 山下 藍

熊本大学では、本年度もGSIS公開講座の受講者の募集を開始いたしました。本年度は、例年の「インストラクショナルデザイン入門編／応用編」に加え、「AI実践アイデアワークショップ編／AIツール開発ハッカソン編」も開講いたします。ぜひご活用ください。

詳細、お申込みについては、以下のウェブサイトをご覧ください。

- GSIS公開講座 インストラクショナルデザイン入門編／応用編
<https://www.gsis.kumamoto-u.ac.jp/koukaikouza/index.html>
- GSIS公開講座 AI実践アイデアワークショップ編／AIツール開発ハッカソン編
<https://www.gsis.kumamoto-u.ac.jp/koukaikouza/ai.html>

講座別の概要は、以下のとおりです。

- GSIS公開講座 インストラクショナルデザイン入門編／応用編

◆対象者：教育に関するお悩みをお持ちの方

図：公開講座受講者募集を告知するresearchmapでのプレスリリース



インストラクショナルデザイン公開講座秘話



図：インストラクショナルデザイン公開講座の魅力を伝えるYouTube動画
 (<https://youtu.be/qTnFAAJVnio>)



熊本大学公開講座インストラクショナルデザイン応用編（東京）レポート



174 回視聴 9 か月前 日本科学未来館
 2024年1月21日（日）熊本大学公開講座インストラクショナルデザイン応用編を東京にて開催いたしました。その様子をレポートします。
 インストラクショナルデザイン公開講座の詳細はこちらから。
<https://www.gsis.kumamoto-u.ac.jp/kou...> ...もっと見る

図：インストラクショナルデザイン公開講座応用編の様子を知らせるYouTube動画
 (<https://youtu.be/megPIbc5JBU>)

「ID公開講座」本年度の取り組み概要

2011年より、教育関係者、企業の研修・教育担当者、医療関係者、日本語教師など、教育・研修を担当する幅広い層を対象に、インストラクショナル・デザイン（以下「ID」）を紹介・学ぶ機会として公開講座を実施しています。本講座は、IDの基礎用語10個を学び、ARCSモデルの活用事例をワークで体験する入門編と、入門編で学んだID基礎用語をベースに、参加者同士のワークを通じて自身の事例を改善し、IDを使う練習を徹底的に行う応用編から構成されています。

いずれの講座においても、事前・事後学習にはMoodleを活用しています。今年度は、入門編の対面ワークショップをZoomによる同期型オンライン研修で実施し、応用編はZoomによる同期型オンライン研修に加えて会場研修を行いました。事前・事後学習については例年通りMoodleを使用し、入門編は5回、応用編は3回実施しました。

◆入門編◆

講師：合田美子、天野慧、土屋理恵

学習目標：

- (1) IDの基礎用語10個がどのような場面でどのように活用できるかを例示できる（知的技能）
- (2) ARCSモデルの視点から、教育事例の課題点を指摘し、適切な改善方法を選ぶことができる（知的技能）

概要：

eラーニングでの自己学習や受講者同士のワークを通じて、IDの基礎用語10個を学んでいきます。また、Zoomを使用したワークショップでは、10個の基礎用語のうちARCSモデルに絞り、講師が提示する教育事例に対して受講者同士で改善策を検討するワークを行います。入門編の目標は、IDの道具をどのような場面でどのように活用できるかを提示できるようになることです。

◆応用編◆

講師：鈴木克明

学習目標：

- (1) IDの基礎用語10個のうち1つ以上を応用して、自分の教育事例の改善案を提示できる（知的技能）
- (2) セミナーで学んだIDモデルを自分の教育事例の改善に応用していこうと思う（態度）

概要：

入門編で学んだIDの基礎用語をベースに、応用編では参加者同士のワークを中心に構成し、IDを活用する練習を徹底的に行います。応用編の目標は、参加者が取り組んでいる教育事例について、IDを用いて改善案を提示できるようになることです。

※昨年度までに入門編の事後テストに合格し修了認定を受けた方や、他の機会>IDを学習し入門編の学習目標を達成している方は、応用編から受講することが可能です。ただし、その場合は、別途案内する応用編の前提課題に取り組み、合格基準を満たす必要があります。

各地会場の参加者数

【入門編】 全受講人数：144名

各回共通：募集人数：48名 開講時間：10:00～16:30 時間数：5.5時間

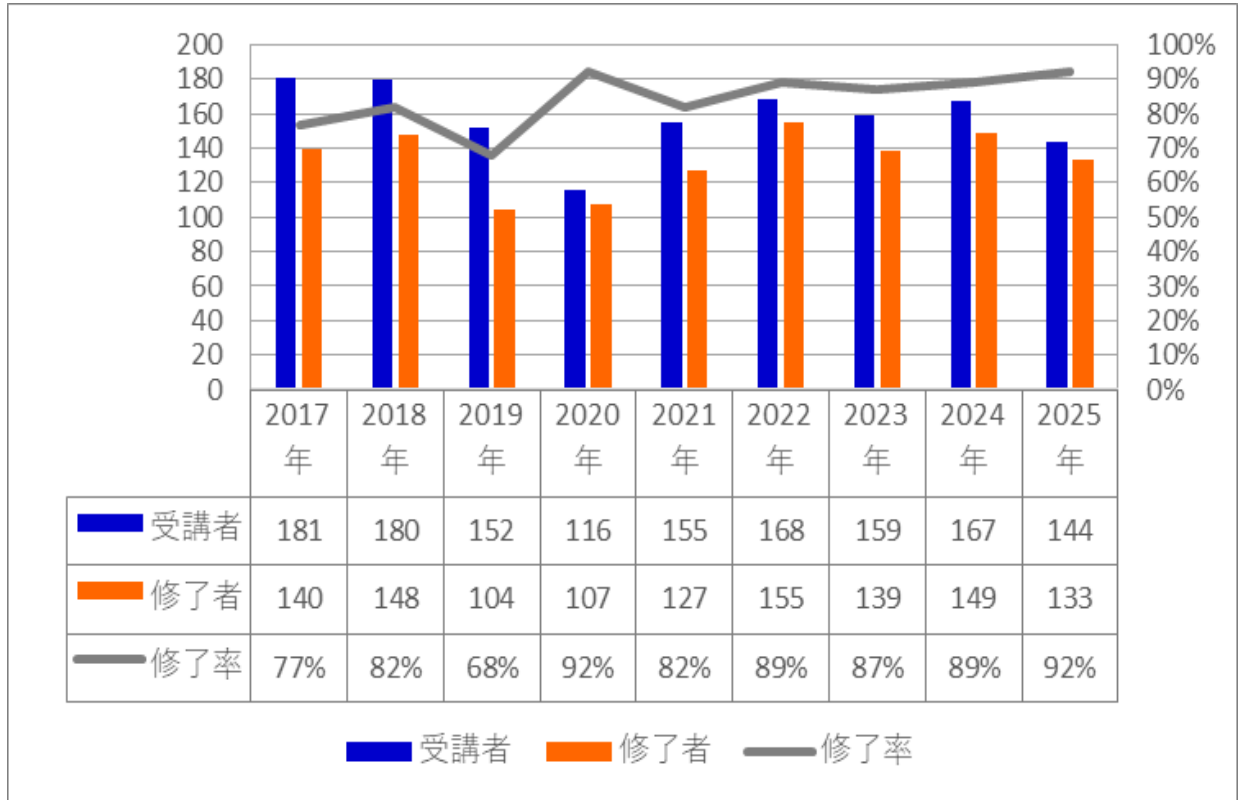
No	講座名	開講日	会場名	受講人数
1	入門編	9/18（木）	Zoom	16名
2	入門編	9/30（火）	Zoom	28名
3	入門編	10/18（土）	Zoom	20名
4	入門編	10/29（水）	Zoom	48名
5	入門編	11/09（日）	Zoom	32名

【応用編】 全受講人数：79名

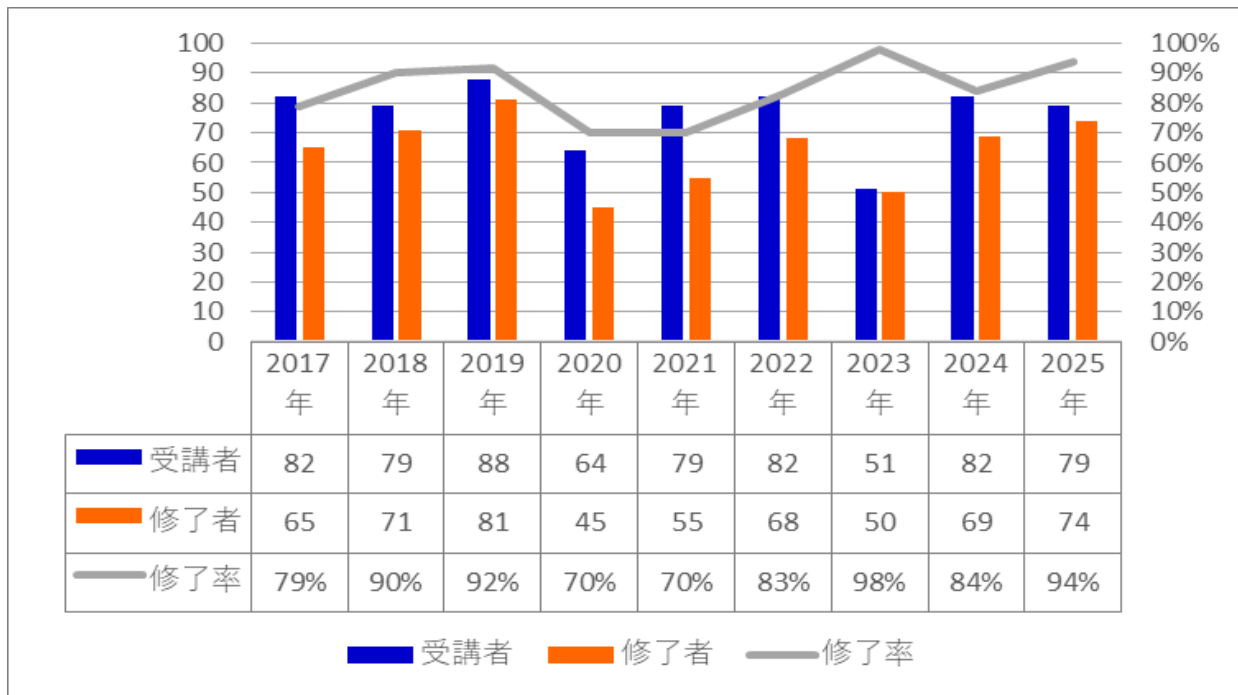
各回共通：募集人数：48名 開講時間：10:00～16:30 時間数：5.5時間

No	講座名	開講日	会場名	受講人数
1	応用編	12/21（日）	Zoom	42名
2	応用編	1/11（日）	東京	28名
3	応用編	2/08（日）	大阪	9名

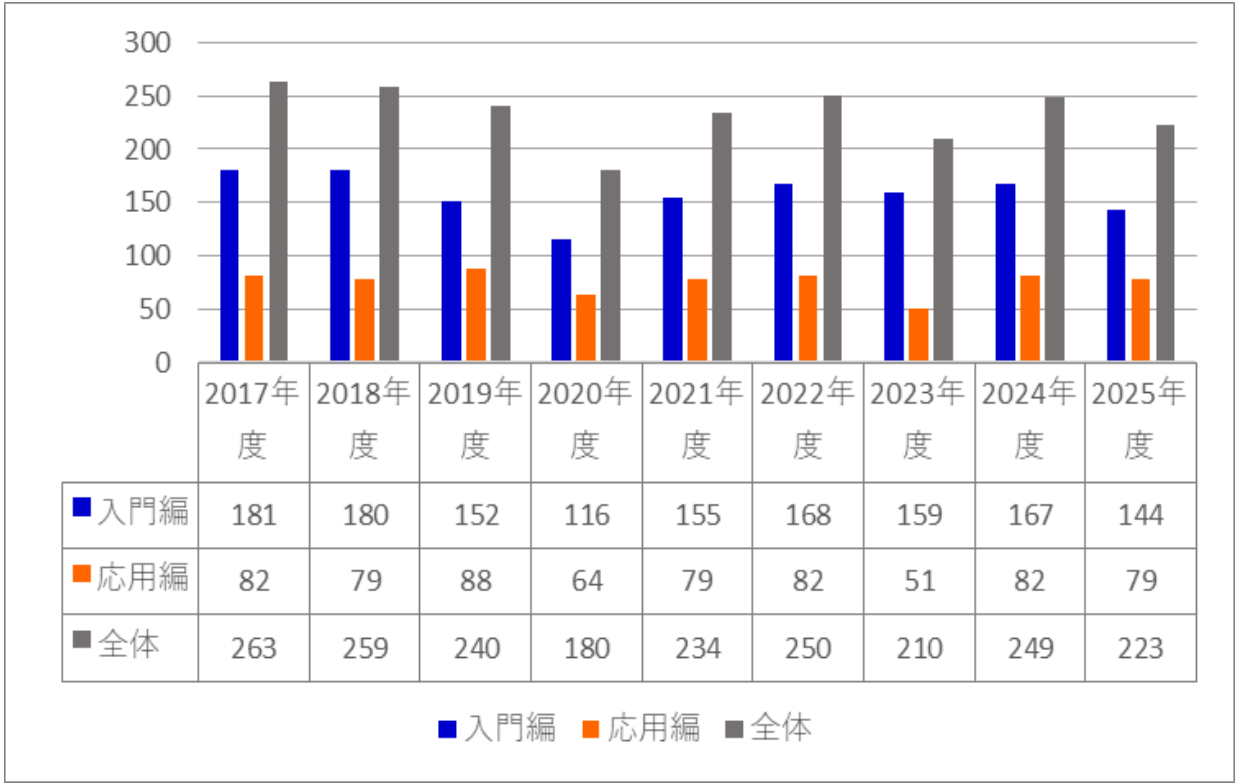
入門編・応用編修了率の推移（レベル２）



図：入門編受講者数に対する修了者数の推移



図：応用編受講者数に対する修了者数の推移



図：受講者数推移（2017年度から2025年度）

上記の図から分かる通り、受講者の推移については、2025年度の入門編・応用編ともに昨年よりわずかに減少しましたが、例年通りの水準を安定的に保っています。また、修了率については近年80%以上の水準を維持しており、今年は入門編・応用編ともに90%を超えました（ここでいう修了とは、受講後に事後課題に取り組み、修了デジタルバッジを取得したことを指します）。

今後も引き続き、研修内容の充実に努めるとともに、事後課題においても単なる形式的な作業にとどまらず、研修での学びを整理・省察し、振り返りを通して今後のプランを計画できるようにすることで、学習の定着だけでなく、研修で得た知識やスキルを実践に活かすきっかけとなるよう、受講者が主体的に取り組めるよう促していきたいと考えています。

プログラム（入門編）の流れ

事前学習

⇒

対面学習当日：

- ・ オープニング
- ・ 質問への回答コーナー その1
(休憩)
- ・ 質問への回答コーナー その2
- ・ 受講者の交流タイム
(ランチ休憩)
- ・ ARCS事例紹介1
(休憩)
- ・ ARCSの事例紹介2
(休憩)
- ・ 事後課題について
- ・ 振り返り
- ・ 全体質疑＆発展学習のご案内
- ・ 受講証書授与
- ・ 事後アンケート
- ・ 応用編参加者の方へ

⇒

事後学習



プログラム（応用編）の内容

事前学習

⇒

対面学習当日：

- ・ オープニング
- ・ グループで事前課題を共有する
- ・ ペアリング1
- ・ ペアで改善案を議論する
(休憩)
- ・ グループメンバーにペアワークの結果を伝える1
- ・ 鈴木先生への質問を考える1
- ・ 鈴木先生に質問しよう1
(ランチ休憩)
- ・ ペアリング2
- ・ ペアで改善案を議論する2
- ・ 席移動
- ・ グループにペアワークの結果を伝える2
(休憩)
- ・ 鈴木先生への質問を考える2
- ・ 鈴木先生に質問しよう2
- ・ 全体質疑、総括
- ・ クロージング、受講証書授与

⇒

事後学習



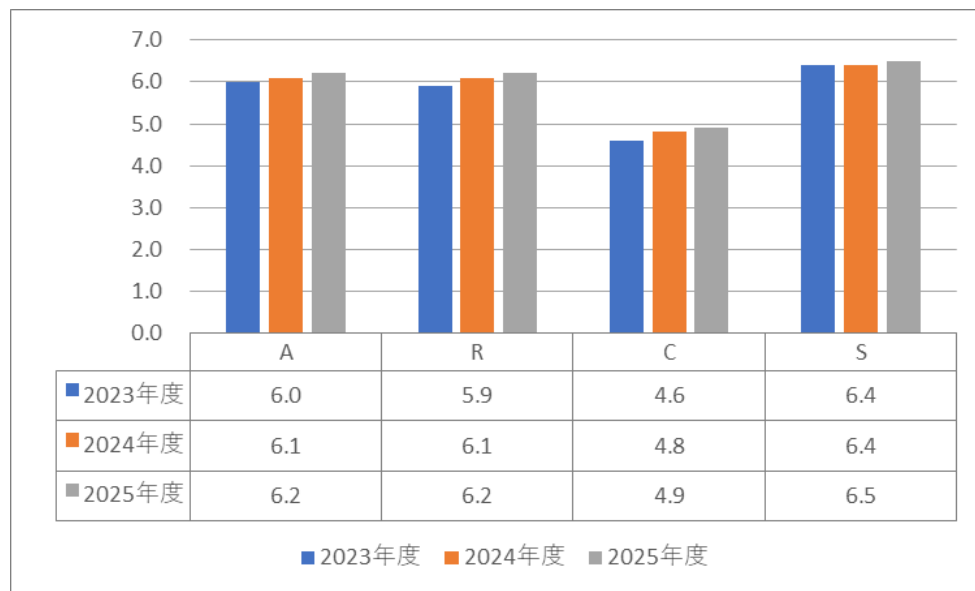
受講後アンケートの結果（レベル2：主観的評価）

2025年度のID入門編・ID応用編受講者に対する受講後アンケート（入門者の参加144名のうち112名（受講者のうち78%）、応用編の参加者79名のうち55名（受講者のうち70%）では、講座に対する印象をARCSモデルに基づき測定し、講座で掲げた学習目標を達成できたかについても、入門編と応用編別に回答を求めました。

1) ID入門編・ID応用編についての印象

講座の印象については、ARCSの各要素別に7段階評価で測定し、全体回答の平均値が2023年度から2025年度までの過去3年間でどのように推移しているかを調査しました。その結果、入門編、応用編ともに、C以外の項目はすべて平均6以上を示した。Cについても、入門編では平均4.9、応用編では5以上の値を示しており、講座全体として高い評価を得ていることが確認できました。

以下の図に、講座への印象に関する回答結果を年度別に示しています。



図：講座（ID入門編）に対する印象のARCS平均値の近年の推移（2023年度～2025年度）

上記のように回答した理由の一部を、以下に示します。

【A:注意】

- ・講義一辺倒ではなく、チームを組んで話し合う機会が多く、考えさせられた。
- ・事前にIDに関する本を読んでいたため、新たな知識を得るという印象を受けなかった点で期待通りの内容でした。
- ・様々なワークがあり、IDについて深く学び合えたから。
- ・今まで実践していた内容について理論的な知識が紐づけられた部分もあれば、新たに企画を考えるうえでの着想も得られるプログラムだった。
- ・講義が少なく、グループワークが多く、自分で知識を応用させたり考える時間が多かったから。
- ・事前課題で十分学習したのち、当日の研修でピア学習することで新たな視点に気づくことができた。講座全体も意図を持ってデザインされていることで主体的に望むことができた。
- ・事前課題、当日の運営も含めて、これまで受講した研修とは全く違っていたため。
- ・川越先生のご説明が非常に興味深かったです。各お部屋での議論も活発だったためです。興味深かった一方で、知識がなくどのツールを使ったらいいか混乱したり、ワーク（特に後半）についていけなかった箇所があったため。自身の事前準備が足りないと感じました。

10個の道具に対して自分ひとりの視点では得られない具体的な内容をグループで話し合い深めることができた。先生方の講義もわかりやすく、腑に落ちることが多かった。

- ・多くの方々とグループワークをすることで、自分では気づかない視点に気づけた。
- ・自身の経験を理論の面から振り返られる、大変良い機会でした。事前課題が充実している仕組みもとても有意義でした。
- ・元々興味はあったが課題を実施することで理解しきれていないことが明確になり、意欲が高まった。

ほとんどの理由は肯定的なものでしたが、「ID自体がよくわからない中での受講であったため、もう少し講義形式で内容を理解したかった」、「IDの基本知識を殆ど有していなかった」、「よくわからない状態でどんどん講習が進んでいったように思います。講習についていけなかった感があります。また、IDについて期待していたほど理解できなかった、イメージを具体化できなかったように思います。私が思う【入門編】と実際の講習は違っていたということだと思います」等との意見も見られました。

【R:関連性】

- ・だんだん理解が深まってきて、いろいろな視点から考察できるようになったため。
- ・今回学んだ内容が、日々の自分の教育活動の改善に十分活用できる。
- ・今後の自分の訓練、教育に活かそうなもの、参考になるものが多くあった。
- ・事前課題を行っておくことで取り組める課題であったから・
- ・グループワーク中心であったため自分が勉強したことを役立てる機会になった。
- ・ワークの内容がどれも、実際のプロジェクトや研修にあると思った内容だったから。
- ・多職種の方と意見交換できたため。
- ・テキストを読んでなんとなく理解していたことが言語化できるようになり、実践の場でも使える、というより使わなければいけないと思ったため。
- ・受講中に改善点・課題を明らかにして、どうしたらよいのか考えながら受講することができたため。
- ・日常業務に活かせる武器が欲しいと思っていたので、10もの武器を得られることにやりがいを感じることもできました。
- ・学んだことを今後の勉強会設計に活かしてみたいと思った。
- ・事前学習で知識の少しを知ることができ、当日の演習で活用について考えることができた参加者とディスカッションするのは意義があった。
- ・受講者の方々が携わっている教育、研修の現場と自信の環境を照らし合わせた時に共感できる部分を見つけて「親しみ」を感じたため。
- ・すでに事前課題をやってから、4段階評価モデルを使っています。実用性があります！
- ・アウトプットの割合が多く、考え続ける研修設計でした。

ほとんどの理由は肯定的なものでしたが、「自分が担当する業務なのでやりがいはあるが、専門用語など多く少し難しく感じました」、「IDの事前知識が少ないため、新知見習得の期待と、まだ知見が少なく迷うこともあったため」、「余りに無知過ぎて、文言一つ一つに理解が乏しいせいか、ついて行けない部分が殆どでした」等との意見も見られました。

【C:自信】

- ・自身の知識と経験をIDに割り当てられることが確認できたため
- ・理論は理解できた。次は、どのように実務に落としこむかを考えていきたいです。
- ・エキスパートグループで確認できたのとどうしてもわからないところを講師の先生に質問できた。
- ・自分の取り組んでいることが間違いではないという自信につながった。また、これからも新しく取り組むことができると感じたため。
- ・ある程度根拠を持って自分の教育活動が改善できそう。引き続き研鑽していきたい。
- ・個人で事前ワークをしていると理解しきれていない部分を明確に理解できたためです。
- ・これまでの活動の振り返りと、今後の改善ポイントがある程度見えたので良かったです。
- ・同じようなことに悩んでいる人たちがいることを知り、悩みながらも少しずつ改善できればいいと励まされたからです。
- ・研修を企画設計する際に意識していることや取り入れていることが、比較的IDの手法に則っていることが分かったため

- ・事前学習を十分にしておけば、当日のワークを楽しんで取り組める内容だったから。
- ・10個の道具について、自身の教育現場にも落とし込めそうと感じたり、活用方法を見出すことができたため。
- ・ID10個のモデルの概要は学べましたが、実際に活用していくと自信につながると思いました。

半数以上が肯定的なものであった一方で、「IDの「先生」になって説明するのは荷が重かった」、「うまく使いこなせるのか・・・」、「IDの知識が少ないため、まだまだ迷うことが多いため」、「これからもっと学んでいけばいいと思った一方で、現状は全然足りてないことを実感したため」、「他の参加者と比べて理解が及んでいないことが多いと感じたため」、「自身の用語の認識が正しいか多少不安であったため」等、他の要素と比べて不安に関する意見も見られました。

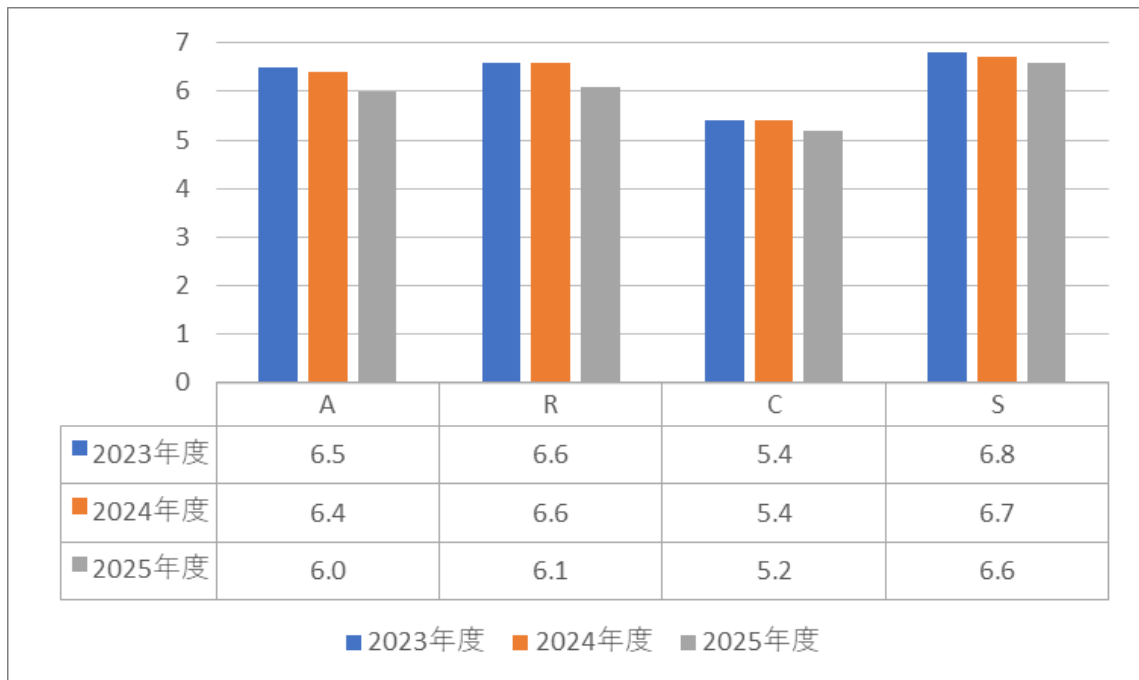
【S:満足感】

- ・IDで設計された研修とはどのようなものか、身をもって体験することができたため。
- ・研修運営自体がIDを取り入れた設計になっているとのことで、事前案内や事前課題の内容、ワーク設計、運営の進め方など受講者目線で体験でき、勉強になりました。
- ・テキストを読んだだけ、自身では生まれなかった気づきがあり、また終了証に一步近づけたから。
- ・少人数制のワークや繰り返しの学習機会があったので、機会として満足度が高かったです。
- ・大変ではありましたが、座学中心ではなくアウトプットするワーク中心だったからこそ、得られた達成感は大きいものでありました。
- ・IDの活用方法について、具体的にイメージできたから。また、先生がたから疑問に対してご丁寧に回答いただき、とても有意義な時間でした。
- ・まだ、すべてを理解するには時間が足りないとは承知していますが、研修の構成や目標等の考え方にヒントが得られたと感じているため。
- ・各理論にはそれぞれ特徴があるが、柔軟に考えればあらゆる場面で活用することができることが分かりました。実践に向けた課題も見えてきました。
- ・独学で「文字を読む」よりも、はるかに理解が深まりました。咀嚼した上で今後どのように活かすことができるか、検討してみたいと考えました。
- ・様々なバックグラウンドの方とともに多くの学びを得ることができた。先生方のコメントも参考になりました。
- ・学びはあったほかに、他職種の方々との情報交換ができて参加者の多様さが面白かった。

ほとんどの理由は肯定的なものでしたが、「ハイレベルで自分には厳しいと感じた」、「自分がグループワークできるレベルではないと実感したから」等の意見もありました。

ARCSモデル各要素の回答理由における否定的な意見をまとめると、ID理論に関する知識が不足しており、事前課題やグループ活動など、講座の学習についていくことが難しかったという意見が共通して見られました。

この点を改善するためには、講座で扱う10のID理論について、受講者が独学で学習できる機会が必要であると考えています。その一案として、講座で扱うID理論の基礎を独学で学習できるコンテンツを作成し、講座開始前（事前課題に取り組む前）に活用できるようにするとともに、必要に応じていつでも参照・学習できる形で整備・提供することを、今後の課題として検討していきます。



図：講座（ID応用編）に対する印象のARCS平均値の近年の推移（2024年度～2025年度）

上記のように回答した理由の一部を、以下に示します。

【A:注意】

- ・鈴木先生の示唆も、受講者間の話し合いも大変刺激的でした。
- ・立場が違う方との議論と同様の業種の方との議論でそれぞれ新しい視点を得ることができたためです。
- ・基礎編で内容を知ったことで、より深くしりかったから。また、自分のやっている研修を通して学べるということ自体が面白そうであったから。
- ・無知過ぎる状態なので、先生方、グループ、ペアメンバーの一言一言が勉強になった。
- ・今回は、自分の課題を詰める作業ができ、大変有意義でした。自分と同じ職種、他の職種の方とお話できて、自分のレポートの説明不足や他の方からのアドバイスによる気づきが得られました。また、先生からの個々へのフィードバックが大変参考になり、モチベーションに繋がった。
- ・自身のケースワークを分析する事前課題、ペアとグループで自己紹介や事前課題を説明するシーンで事前課題への理解が深まった。
- ・個別の疑問に鈴木先生がズバズバ回答してくださったこと&個別FBが想像以上のボリュームだった。
- ・ID理論が自分の実施している研修にどう組み込まれていたのか、改善する方法をより一層知ることができたことと、他の方が実践されている研修設計への悩みを伺いその悩みへの改善策を意見交換する中で学びが多かったため。

ほとんどの理由は肯定的なものでしたが、「グループメンバーからの学びは非常に実り多いものであったが、若干なりともIDに関するINPUT（書籍、事前課題では得られない対面ならではの内容）があるとさらに興味が増したと思う。知れば知るほど疑問が増え、どんどん自走していこうという良い意味での気持ちがさらに高まったのではないかなと思う」との意見もありました。

【R:関連性】

- ・自分の授業に改めて向き合った時間とそれをブラッシュアップできた成果で満足感があった。
- ・ディスカッション形式が多かったためチームメイトの方から得ることもたくさんあり、さらには自身の事例についても親身にても考えてもらえたため。
- ・今回は、自分の課題を詰めることができ、実現に近づいたと思う。

- ・他者の質問やペア・グループワークを通して自身の認識のズレや、あいまいだったところが少しずつクリアになったこと。
- ・自身の課題と、鈴木先生のコメントを見て、どこを改善しなければいけないのかを考えながら受講できたから。
- ・実務に直結する内容だったから。また実際に自分で手や頭を使って色々考えたり、行動計画を立てたから。今後実務に持ち帰ったときに、今後の教育コンテンツへの活用を考えるきっかけとなったから。

ほとんどの理由は肯定的なものでしたが、「課題を提出した達成感はありませんが、完成度については自信がありません」との意見もありました。

【C:自信】

- ・思い付きの施策について根拠が伴うようになってきたので良かったです。
- ・今日の改善点を踏まえて実行することにより、今よりも活動がよくできそうと感じたから。
- ・入門編ではIDモデルをどう活用すべきか悩んでいたが、今回では具体的に取り込む方法などをディスカッションを通して模索することができたため。
- ・ペアワークにおいて考えに共感いただけたこと、お互いの良いアイデアを取り込むことができそうだと感じた。
- ・入門編に比べて、モデルの活用方法について理解が深まったため。
- ・基礎編で学んだ理論を実践するための練習の機会となったため
- ・今までの研修設計が大枠間違えていなかったことが分かったから。
- ・鈴木先生からいただいた事前課題へのコメントで、「良い着眼点ですね」とのお言葉をいただき、少し自信が持てました。

半数以上が肯定的なものであった一方で、「IDの理解度がまだまだなので自信にはつながらなかった」、「理解できることは多かったですが、まだIDを自分のものとして使いこなせないと感じたため」、「IDの基本原則を十分に理解しきれていないところもあり、未だ未だ自信が持てる状況とまでは言えない」、「もう一度基本から学びなおしの必要を痛感した」等、他の要素と比べて不安に関する意見も見られました。

【S:満足感】

- ・教科書以外の授業の興味の持たせ方を学ぶことができたと思います。
 - ・机上で仕事をするのではなく、様々な方と学びあうことで刺激を得ることができたため。
 - ・一問一答で疑問を回答していただく中で学び多く、もっと伺いたいと思ったため
- ワークは対面がやりやすいと思ったのと、懇親会が楽しかったため
- ・他の方の事例や対話を通して学びが大きかったから。先生方からのコメントがバサッと聞いているように聞こえつつも、放置するようなアドバイスではなかったから。
 - ・学びも多かったが、研修目的、方法などを言葉にして伝える過程で自分の思考が整理できた部分でも参加して良かったと思った。
 - ・新たな学びを得られたため、また自分がいま設計している研修への手応えを感じられたため
 - ・業務に活かしたいと思った。ID自体に興味を持つことができた。
 - ・自分たちの設計で改善できることがたくさんあるんだとある意味閉塞感から解放されたから。
 - ・似た業務をしている外部企業や教育機関の方から自分の事前課題にコメントをもらったり、意見交換できた機会となったから。似たような課題感を多くの方が持っていることもわかった。それをじゃあどうよりよい方向に改善していくかが重要。現状や課題と向き合って取り組んでいきたいと思った。

ARCSモデル各要素の回答理由における否定的な意見をまとめると、入門編と同様、ID理論に関する知識不足による意見が目立ちました。講座で扱う10のID理論について、受講者が基礎知識を身につけた状態で講座に臨めるよう、独学で学習できる機会が必要であると考えています。その一案として、講座で扱うID理論の基礎を独学で学習できるコンテンツの作成を、今後の課題として検討していきます。

2) ID入門編・ID応用編での学習目標達成状況について

【入門編の学習目標】

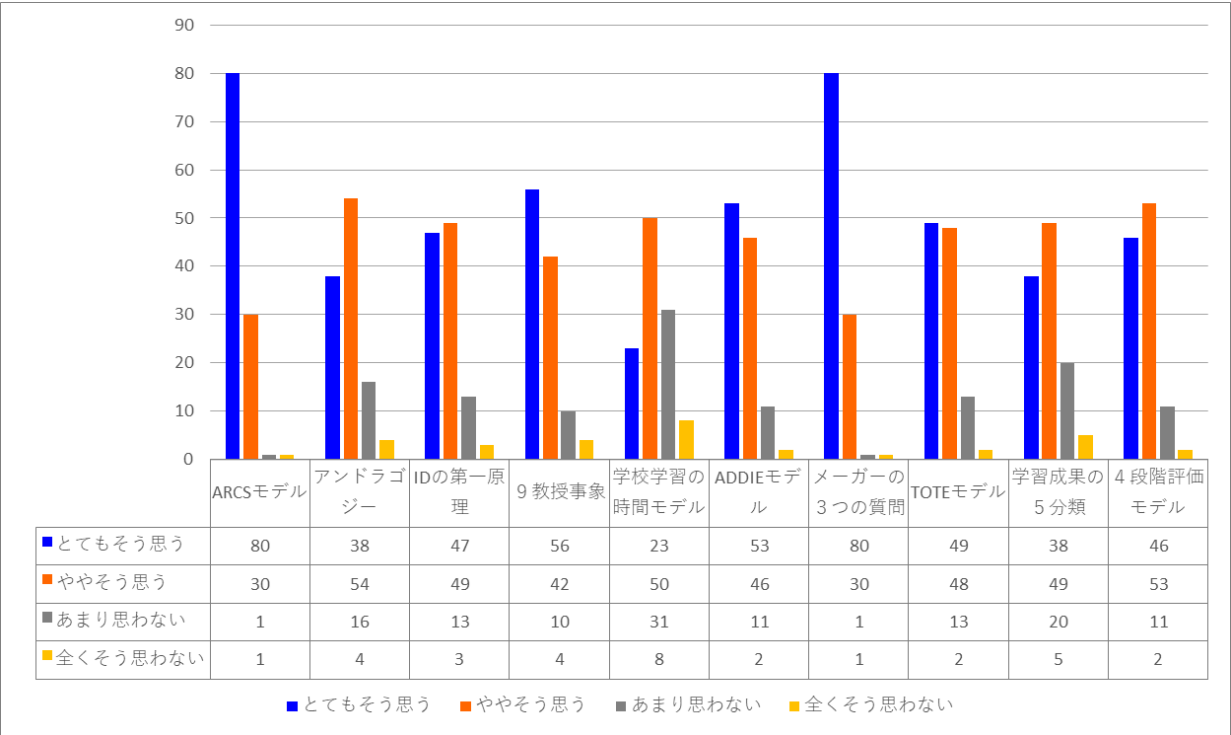
- 学習目標1：IDの基礎用語10個がどのような場面でどのように活用できるかを例示できる（知的技能）
学習目標2：ARCSモデルの視点から、教育事例の課題点を指摘し、適切な改善方法を選ぶことができる

【応用編の学習目標】

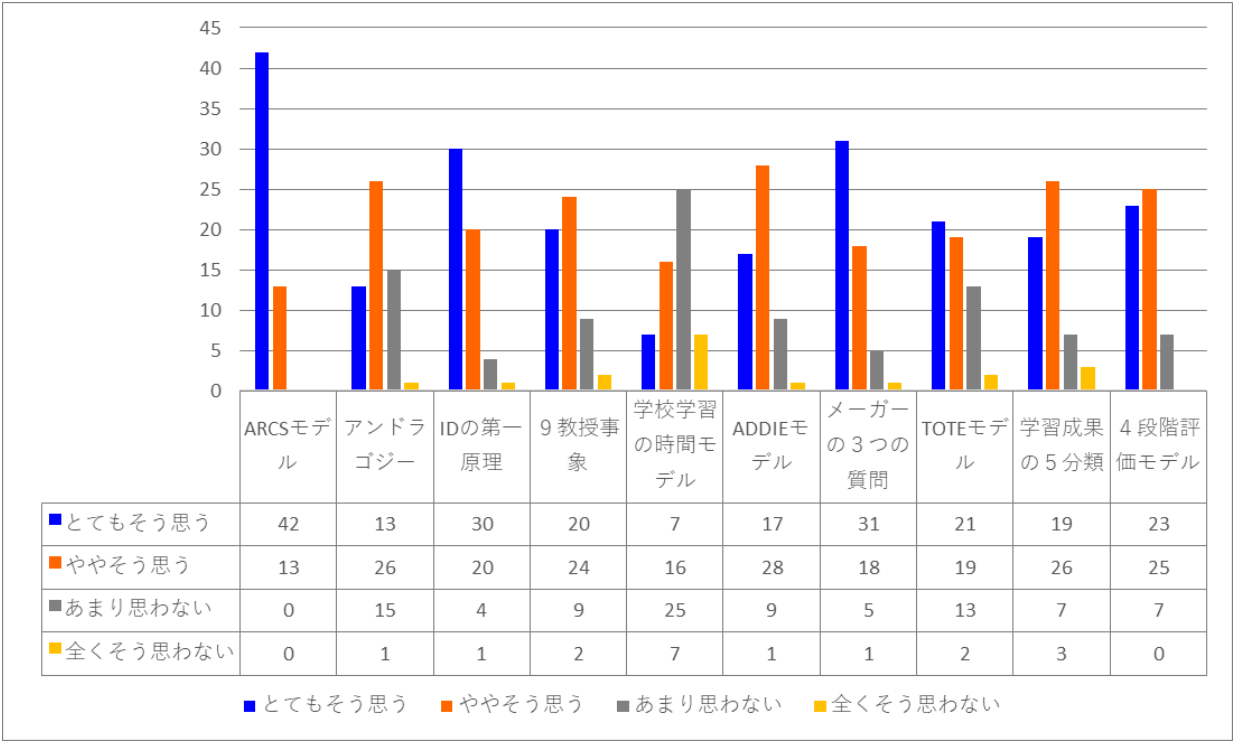
- 学習目標1：IDの基礎用語10個のうち1つ以上を応用して、自分の教育事例の改善案を提示できる（知的技能）
学習目標2：セミナーで学んだIDモデルを自分の教育事例の改善に応用していこうと思う（態度）

入門編で掲げた学習目標1の達成については、「とてもそう思う」、「ややそう思う」の回答が85.8%となりました。学習目標2の達成についても、「とてもそう思う」、「ややそう思う」の回答が97.3%と高い値を示しました。
応用編で掲げた学習目標1の達成については、「とてもそう思う」、「ややそう思う」との回答が79.6%を示しました。
また、学習目標2の達成についても、「とてもそう思う」、「ややそう思う」の回答が97.3%となりました。
入門編と応用編での学習目標達成に関し、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」が過半数を超えている項目は、応用編の学習目標1における「学校学習の時間モデル」の1項目のみでした。

以下に、入門編学習目標1の到達状況と、応用編学習目標1の到達状況に関する回答結果を提示します。



図：ID入門編学習目標1の到達状況（2025年度）



図：ID応用編学習目標の到達状況（2025年度）

参加者の声（レベル1）

2025年度ID応用編へ参加された方からいただいたコメントの一部を、以下にご紹介します。

設問内容：応用編について、良かったと思う点

<ペアワーク・グループワーク・他者との学びに関すること>

- ・受講者の皆さんが様々な知見をお持ちで、入門編と比較してペアワークの価値がとても増しました。
 - ・皆さんとの対話を深めた学習。ペアワークと本部との間でコミュニケーションを通して学べたことは大きかったと思います。
 - ・同じ思いを持った考えの方からの意見をもらえた。新しい課題が見つかった。
 - ・積極的に話をされる方が多かったのでやりやすかったです。
 - ・今日、ディスカッションしたことを早く明日会社で使いたいなと終えました。
- 全く違う分野の方々とお話ができた、入門編での疑問を回収し実践につなげる糸口となった。
- ・ペアワークで第三者に悩みを聞いていただけた。
 - ・ペアワークも人によるが、学ぶ点が多かった。質疑応答ははたから聞いているだけでも学びがある。
 - ・他業種の方からの意見、アドバイス、問題意識の共有。
 - ・ワークの質が上がった、受講生同士では五コンテキストで会話ができた。
 - ・同じ用語を選んだ人とのペアワーク。
 - ・グループワークが刺激的だった。色んなグループの課題に対する回答が聞けて良かった。
 - ・様々な人と意見交換ができた。
 - ・同じ職種の方からは具体的な助言が得られ、その方がARCSモデルをもとにかなり詳しく計画を立てていらっしやったので、自分も同じように細かく明文化する必要性を感じモチベーションに繋がった。
 - ・人と話すことで自分の研修プランの大切にしたいこと、重要なポイントが明らかになった。
 - ・ホームグループのメンバーの背景が自身と近すぎず遠すぎずという印象で、ディスカッションしやすかった。
 - ・他職種の人と話せて楽しかった。最初から質の高いレポートが書けていたので、自分のIDの使い方、活動内容が間違っていないと肯定してもらえてよかった。
 - ・ペアワーク（今回は境遇が同じ方とマッチしたことも大きい）
 - ・自分自身の課題を見つけ出し、他者と共有する時間が密であったため。
 - ・ほかの方のIDをどう使っているかを学べて参考になった
 - ・受講生から改善のアドバイスもいただき、自分にはない発想に触れることができたから。
 - ・事前にペアワークの相手を考えることが当日の準備につながった。ワークに取り組みやすかったと思う。
 - ・事前課題のワークを自分の言葉で他者に説明することで、自身の(IDの道具に対する)理解度を確認出来たこと。
 - ・ペアとグループの組み方がよかった。
 - ・多様な現場で同じような課題意識を持つ皆さんのリアルな取り組みや試行錯誤を知ることができた。
 - ・ひとつのグループだけでなく、別の方とのペアワークがあったこと。
 - ・（グループのメンバーによるのかもしれませんが）自分の課題についてグループで自分の体験などを交えて詳細を話し合えたので、具体的な課題の解決案がいくつか明確になった点。
 - ・様々な業界の方々と積極的に議論ができた点。

- ・参加人数が少なかったので、いろいろな話を聞けました。飲み会で熊本大学のお話を聞けました。
- ・自分のまとめたワークシートに関して、私のことを全く知らない方から助言をいただいたこと。
- ・同じモデルに興味のある方の話を聞くことで、新たな使い方に気がつくことができたこと。
- ・他分野、他立場の方の意見が聞けたこと。
- ・GWの時間的余裕があり、入門編よりもより深く話し合えた点。
- ・対面での参加だったので、ディスカッションで本音で生声をお聞きすることができたと感じた。
- ・他の方の研修設計についてディスカッションをしたことで、同じような悩みであったり課題感を見つけることができた。
- ・異なる世界の異なる視点での議論に刺激をいただいたこと。
- ・対面でディスカッションできたこと、入門編の学びを深めることができたこと。
- ・ペアでの課題共有とフィードバックの実施。
- ・ワークを通して自分の実践を振り返ることができ、今後の改善点が明確になりました。
- ・様々な人と意見交流ができたこと。
- ・背景の異なるグループメンバーからのフィードバック。対面ならではのつながり（今後の関係）が築けたこと。
- ・様々な視点から意見・悩み・疑問を共有してもらえたこと。
- ・実際に研修設計される方々との交流。

<添削・フィードバック・教員による指導に関すること>

- ・一問一答の鈴木先生からの回答と他の参加者との意見交換（ペアの方が仕事の領域が近い方で意見交換しやすく、グループでは異業種の研修の話を伺え刺激となりました）
- ワークでの色々な方との交流、懇親会での意見交換ができたのは良かったです。
- ・鈴木先生の怒涛のきっぱり回答、鈴木先生のクリスマスプレゼント。
- ・鈴木先生のお話はシンプルで大変理解しやすかったです。応用編まで進んでよかったです。
- ・鈴木先生からのコメント：バサッといかれつつも、あったかい言葉があることで、学習が深まりました。戸田先生とのやり取りの間でもわかりやすかったです。
- ・鈴木先生の強い導きが自分の弱さを炙り出してくれた。
- ・鈴木先生のコメントをもって聞いてみたかったが、良い質問はなかなか難しい。
- ・鈴木先生直々に質問に答えてくれた(はっきり仰る先生で聞いている側はすっきりしました)
- ・鈴木先生に質問に答えて頂けたこと。似た業務を行う外部の方と似た課題感を共有して意見交換できたこと。
- ・鈴木先生が自ら添削してくれること、質問に答えてくれること。
- ・鈴木先生への各グループからの質問の内容で自分にあてはまるものもあり、「同じ悩みを持つ仲間がいる」ということを知ることで、やる気に繋がったこと。
- ・鈴木先生のアドバイスをたくさん聴けたこと。
- ・鈴木先生から自分のレポートについて、コメントを頂けたこと。
- ・鈴木先生のコメントで自分の悩んでいた部分が解決できたこと。
- ・鈴木先生からのアドバイスがあったこと、サポート頂く先生方が学びやすい環境作りをしてくださったこと。
- ・事前課題に対して鈴木先生からコメントをいただけたこと。
- ・事前課題（提出とコメントをしあう部分含めて）。

<プログラムの内容・成果>

- ・具体事例がとても参考になった。

- ・自分自身の生の事例を活用した受講だったので、実務に繋げることができるイメージが湧いた。
- ・自分の課題をブラッシュアップできた。
- ・様々な道具が関連していることが理解できた。
- ・受講生のきもちになって考えることもできたこと。
- ・自身の講義設計の改善案が見つかった点
- ・自分の課題に対しても、すでに解決策を立案している方がいたため、新たな知見を得ることができた。
- ・出口戦略の明確化。ラーニングピラミッドが大嘘ということ。
- ・応用編を通じて、学習目標・教授方法・評価方法の一貫性を実感することができた。
- ・対面でのワークはよかった。
- ・アウトプット中心。ブラッシュアップできるタイミングが2回あった。
- ・入門編で得た知識を活用できる。
- ・鈴木先生への質疑応答の中で「本日の応用編において、我々の学習目標達成のための一番の肝はどこでしたか？」と質問させて頂いたのですが、そこで「事後課題のアウトプットを高めること」と回答頂きました。その回答を得て、当日体験してきたプログラムの設計（例：不要な自己紹介時間や感想共有時間がない、自身の事例を軸とした相互フィードバック・疑問点の解消に終始している）の意図について、ストーリーが見え、自分の中でその感覚を理解できたように感じました。事前課題からのデザインも含めて、学習目標・教授方法・評価方法を一貫させるとはこういうことかと腹落ちしました。
- ・講座内だけで完結しない学びの仕掛けがあることです。例えば、クラスメイト全員の事例に対する鈴木先生のコメントを拝読できる機会がある等、参加者の意欲や能力によって、学びの質を高められる工夫がされている点が学びになりました。

6 ヶ月後追跡アンケートの結果（レベル3）

<講座前と講座後（現在）の状況について>

インストラクショナルデザイン公開講座 応用編（2024年度）の6か月後追跡調査アンケートでは、デジタルバッジ取得者69名のうち21名（取得者の約30%）から回答を得ました。アンケートでは、以下の項目について、講座前と講座後（現在）の状況を7段階で評価してもらいました。

- 講座で学んだことを自分の言葉でどの程度書き出せるか／書き出せていたか
- 講座で学んだことを業務でどの程度使おうと思っているか／思っていたか
- 講座で学んだことをどの程度応用できるか／応用できていたか
- 講座で学んだことを実際の業務でどの程度活用できているか／活用できていたか

その結果、いずれの項目も「講座前」の評価が「講座後（現在）」を上回ることはなく、特に「講座で学んだことを業務で使おうと思っているか／思っていたか」では、講座後（現在）の評価が6.3と高く、講座での学びを業務で活かそうとする意志が強いことがうかがえました。他の項目についても、講座後（現在）の評価はすべて4.3以上で、いずれも一定の成果が見られました。

<職場での行動へ移すための準備状況について>

講座後の行動に移すための準備状況について、以下の項目で回答を得ました。

- 講座終了時点で、学んだことをしっかり業務に活かそうという気持ちが、他の業務に対する気持ちよりも強かったか
- 講座終了時点で、学びを仕事に活かすための具体的な目標（ゴール）を設定していたか
- 講座終了時点で、他の業務で忙しくても、学んだことを仕事に活かすために努力する覚悟があったか
- 講座終了時点で、職場に戻った後にやるべきことを具体的に記載した行動計画を作成できていたか
- 講座終了後、職場で学んだことを仕事に活かすために、自分の気持ちをコントロールできていたか
- 講座終了後、職場でモチベーションが下がっても、学んだことを仕事で活かせるよう努力を重ねることができていたか
- 講座終了後、他の目標の影響を受けず、学んだことを仕事に活かそうとし続けることができていたか

本アンケートの結果、全ての設問において「そう思う」「ややそう思う」と回答した割合が「あまりそう思わない」「全くそう思わない」を上回りました。特に、「学んだことをしっかり業務に活かしていこうという気持ちが他の業務に対する気持ちよりも強かった」、「他の業務で忙しくても学んだことを仕事に活かすために努力する覚悟があった」、「学んだことを仕事に活かすために自分の気持ちをコントロールすることができていた」については、肯定的回答が86%を占めました。また、「他の目標の影響を受けず、学んだことを仕事に活かそうとし続けることができた」についても、肯定的回答が81%に達しました。

これらの結果から、受講者は講座で学んだ内容を単に理解するだけでなく、実際の業務に活かそうとする意欲と準備が整っていることが示されました。特に、学びを持続的に業務に応用する姿勢が高く、講座の内容や構成が業務への実践的応用を意識した設計になっていたことが効果的に働いたと考えられます。

<職場での機会・環境について>

講座後の実践状況と周囲からの評価について、以下の項目で回答を得ました。

- 講座で学んだ内容を復習する機会があったか
- 講座での学びを職場で実際に活用する機会があったか
- 職場の上長は、講座での学びを職務で活用することを奨励していたか
- 職場の同僚は、講座での学びを職務で活用することを奨励していたか
- 講座での学びを活用したことによる業務での成果を、上長から認めてもらえる機会があったか
- 講座での学びを活用したことによる業務での成果を、同僚から認めてもらえる機会があったか
- 講座での学びを職場で報告する機会があったか
- 講座での学びの活用状況を職場で定期的に確認する機会があったか

その結果、全ての設問において「そう思う」「ややそう思う」の肯定的回答が「あまりそう思わない」「全くそう思わない」を上回りました。特に、「講座での学びを職場で実際に活用する機会があった」については、「とてもそう思う」「ややそう思う」と回答した受講者が90%を占めました。一方で、「職場の上長は講座での学びを職務で活用することを奨励していた」「職場の同僚は講座での学びを職務で活用することを奨励していた」については、「どちらとも言えない」が肯定・否定を上回る結果となりました。これは、受講者が個人レベルで改善に取り組むケースが多く、そもそも組織に属さない受講者も含まれていたことが影響していると考えられます。今後も、講座内容の充実と受講者のニーズに合わせた改善を引き続き行っていきます。

以下に、6か月後追跡調査で明らかになった教育改善への取り組み状況と、実際にどのような取り組みが行われ、どのような成果が得られたかの一部を紹介します。

<講座で学んだことをどのように業務で活用できているか>

- 講座修了後に外部講師による社内研修の事務局を担当しましたが、自信を持って対応できたように思いました。また、講座で学んだ考え方を元に少しずつではありますが研修内容を変えられたように思います。
- 授業デザインの考え方に大きく影響を及ぼした。それまでは、学生に対し、記憶（暗記）を重要視した試験ばかりを行っており、学習内容が活用できている窯で考えていなかった。この講座を受講して、授業にも活用し、学生から高評価を得られているため、実際の業務で活用できていると考える。
- 自身の担当部署内での人材育成には活用しているが、人材開発の部門長という立場で全社にこのやり方を浸透させることは不十分である。
- 私が所属している部署はリサーチコンプライアンスに関係する研修を行っている。自部署で行っている研修を少しでも良くしたいと思い受講した。研修講座受講後に学んだことを部署にフィードバックした。それをきっかけに部署で行っている各種研修の見直しをし、アリバイ研修に近い研修については必要最小限とする形にした。年度が替わり組織改定により研修に対する考え方も担当者も変更となり、それ以上の変更は行えない状態。
- 本校の授業内容は定期的に見直しをしており、来年度の内容は一部取り入れて構築を始めている。
- 4月から新しい大学に移り、昨年度までとは属性の異なる学生を対象に授業を実施。3年生を対象にした授業については、所属長から「履歴書が書けるようになること」を目標にしてほしいと明確な指示があったので科目終了時点で「学習目標の明確化」を意識できた。また鈴木先生からのアドバイスである「最初は強制でも、やったら楽しい」を意識して各回の授業設計に取り組んだ。学生からのコメントでも効果を確認できた。

- 自身の研修や講座の設計時に、ID のツールや講座で学んだことを振り返りながら設計をしているため。以前はカリキュラムや内容から考えていたが、今では「この研修でどのような行動変容を促したいか？」ということを考えてから具体的な骨子に落とし込んでいく。研修本編では興味関心を持ってもらえるかをARCSと9教授法で、研修内容が定着するかを事前/事後課題でどのようにカバーするかを考えている。
- 社内開催での階層別研修に、本講座で学んだ事を取り入れ実践している。特に前後に確認テストを実施することで研修の効果が見えやすくなったと感じている。
- インストラクショナルデザインの理論を学ぶことで、具体的には、アークスモデルだがその理論に当てはめながら講義を組むことによって講義のポイントを作り出すことができた。
- 訓練生や現役の運航乗務員に対し学びや気づきを与えるに当たって、ID 講座の内容、例えばアンドラゴジーを活用するなど自発的な学びの姿勢を確立させる方法を活用しています。そのフィードバックとして、過去事例を用いてディスカッションしたり、訓練シナリオに取り入れたりして次へのステップに繋げることもできています。
- 応用編では国試対策の課題に焦点を当てて受講した。応用編参加時点では、その年度の国試対策は大詰め段階。現時点では国試対策は実施前であり、大きく活用する状況にない。今後活用していくことになると思う。一方で、基礎編から学んできたID の視点全般的な観点から振り返れば、授業設計やシラバス、試験、全般的に、意図的にID の視点を組み込もうとしている。ID 第一原理で言えば統合までは至らないが、応用しようと模索している段階。
- 大学学部生に対する講義や社会人向けセミナー、企業研修の企画設計の段階で活用しています。
- 事前課題や事前実力確認などを導入し、受講生のスタート地点を相互に共有することで、ゴールへの意識も共有することができている。研修設計についても、自分でできることと集合形式でなければできないことを区別して選別し、フォローアップ評価を実施している。
- インストラクショナルデザインの工具箱や、講座の資料などを読み返して、実際の自身の業務に置き換えて少しずつ実際の授業で試している。不十分でも取り掛かることで不備や不足部分は修正しているので、活用できているか不安はありますが進んでいる感じがしています。
- 今年度、私は大学院の講義で授業設計理論について初めてカリキュラムを作り、15 回の講義を行いました。その設計はID モデルの
- 「メーガーの3つの質問」、「ARCS モデル」、「9 教授事象」を使って設計し、評価においても「ADIE 今年度、私は大学院の講義で授業設計理論について初めてカリキュラムを作り、15 回の講義を行いました。その設計はID モデルの「メーガーの3つの質問」、「ARCSモデル」、「9 教授事象」を使って設計し、評価においても「4 段階評価モデル」を参考に評価を行い、授業改善においては「ADDIE モデル」を意識して授業改善を行ってきました。講座で学んだことを活かしていると思います。
- これまでは自分が行ってきた勘と経験を頼りに研修をデザインしてきましたが、本講座で学んだ理論に基づき、体系的で効果的な研修設計を意識できるようになりました。特に、受講者一人ひとりが当事者意識をもって、積極的に関わられるような研修を意図して設計できるようになった点が、自分の中で大きな成長と感じます。
- 受講時は介護系セミナー講師として個人事業主でしたが、現在は廃業し専業主婦となっています。しかし、現在でも依頼を受ける研修やセミナーでは、必ず「メーガーの3つの質問」と「ガニエの9 段階」を活用して設計しています。以前は研修構成に不安を感じることも多かったのですが、インストラクショナルデザインの理論を学んだことで、体系的なアプローチができるようになり、研修の構成に自信を持てるように変化しました。学んだ内容は現在の活動においても確実に活かされています。

- 講座でレポートに書いた業務は、まだ契約が始まっていないため試せていないが、別の講座や授業を持っているため、そちらでは、授業の組み立ての際、これまで：教科書の該当ページをどのように教えるか、事例をどうするか、受講後：教科書の該当ページで何を習得させたいか、そのためにはどういう事例を使うかという風に考え方が変わり、事前に準備する資料や事前調査等もかなり増えたので意識が変わったと感じている。また、全く違う業務の際も、例えば打ち合わせやプレゼン、営業などでも、完ぺきではないけれど、着地点は何か、何を不得てもらうことでどんな効果が感じられるかなどを考えて資料作成や営業をするようになったように思う。
- 理論と現実にはギャップがあり、「人」という不確かなものを相手にする世界の落としどころを教えていただきました。「アリバイ研修も大切な意味がある」「人生を渡っていくための術」など、高い視座で学習者のためになることを考えることの大切さを理解しました。

⇒「講座で学んだことをどのように業務で活用できているか」の記述から、受講者の多くは講座で立てた計画を実践し、一定の効果を得ており、講座での学びが業務に活かされていることがうかがえます。一方、部署異動で担当業務を外れた受講者や、会社の方針の影響で思うように活用できていない受講者も一部見られました。しかし、そのような場合でも、個人の取り組みとして改善にIDモデルを導入し、当初の計画通りに進められなくても、自身のできる範囲で実践している事例が確認されています。

<講座での学びを職場で実際に活用していくうえで有効だったこと>

- 講義の分析・改善ワークシートにより、講義内容を振り返ることができた。また、そのワークを通じて得た内容を同僚に伝える機会があり、一定の評価を得、学内の学長裁量費を得ることができた。
- 応用編での一番の収穫は、鈴木先生への質問コーナー（と、その時のメモ）だったと感じている。他の人の質問で、自分では少し違和感のある内容（なんでそんなわかりきったことを聞くのか、など）もあったが、そういう質問にも鈴木先生の回答の中から学べる部分があり、それはテキストや解説では得られない内容だったと感じた。（どの部分が自分に響くのか、というのは受講者によって異なると思うが、そこが大事なんだと思う）
- 事後課題や半年後の追跡調査について、受講開始時点からわかっていたものの効果が大きいと感じた。学んだ内容をどのように活かすのかを考えながら受講することの効果について、受講者の立場で改めて実感できた。
- 講座の中で、現状と課題について鈴木先生にコメントを頂いたことで、問題の認識と改善につなげる意識が生じた。
- 鈴木先生からの回答は、今後の活動の方向性を直感的に理解するのに役立った。グループワークの進め方、考え方、準備、様式などは、流用しやすく、とても役立つアイテムと感じた。
- 新人研修において、現場研修を担当することとなり、特に ARCS モデルをもとに設計をした。グループワークを多めにすることで、新入社員が興味を持って研修を受講してくれた。
- 応用編参加にあたっては国試対策に焦点を当てて課題解決に取り組みましたが、参加直後に勤務先の専門学校で開催した「多職種連携チーム医療演習」の学科内事後課題として、ID 初心者なりに視点を組み込んで、自己評価をさせる小論文(リフレクションペーパー)の課題を作成しました。これは、応用編後の飲み会での戸田先生の一言「本来採点が一番おいしいところ。そこを教員が持って行くのはもったいない」という言葉をヒントに作成しました。今振り返ればその課題も改善の余地は多々ありますが、そのレベルでも他科の先生方より称賛をいただき、他科でも実施されました。
- 講座で学んだ ID モデルと改善計画シートは、そのまま授業設計や研修設計に活かすことができました。

- インストラクショナルデザインについて理解が出来ているとは到底思わないが、資料や本などの文献、講座の出来事などを振り返って少しずつですが実践するようにしています。自身の進捗状況を確認してもらえないので不安はありますが、今は始めるようにしています。基本的には ARCS モデルを常に参考と指針として進めています。
- 研修デザインをするとき「当事者意識」を高めるための具体的なアプローチが、有効でした。講座内容に関連した身近な問いかけから始めるアイスブレイクを導入してみました。受講者の緊張もとけ、とても良い雰囲気ですスタートできるようになりました。学んだ知識をすぐに試してみるペアワークやグループディスカッション、アウトプットを意図的に増やすことで、「やらされ感」のない主体的な学びの場が作れるようになりました。
- 最も有効だったのは「メーガーの3つの質問」を研修設計の基盤にしたことです。以前は「研修のゴール」を意識してもらうのみだったので、「学習者は何ができるようになるべきか」「それをどう測定するか」「どのような学習体験を提供するか」を明確にすることで、研修の方向性が定まり、受講側にも伝わりやすくなったと感じます。

⇒ 「講座での学びを職場で実際に活用していくうえで有効だったこと」の記述から、講座での学びが受講者の業務や研修設計に実際に応用され、効果を得ていることが確認できます。また、講座内での質問やグループワークを通じて同僚や講師からフィードバックを得ることで、テキストや資料だけでは得られない学びを体得し、主体的に教育改善に取り組む姿勢が促されています。これらのことから、講座は受講者に単なる知識習得の場を提供するだけでなく、計画的・構造的に学びを業務へ応用するスキルや意識を醸成する効果的な学習設計となっていることがうかがえます。

共同利用拠点事業②

IDポータル

本大学ではインストラクショナル・デザインに関するイベントや文献等の
情報を収集するためのサイト「IDポータル」を運営しています。

本年度の取り組みの概要

IDに関する情報収集のためのウェブサイト「IDポータル」を運用しています。IDポータルでは、IDと関連する学会やワークショップ等のイベント、IDに基づいた教育実践をまとめた論文情報、教育実践のお悩みをIDに基づいて解決するQandA等を提供しています。

過年度のGoogleアナリティクス導入によって、IDポータルに愛着を持つ関係者に対して、IDポータル外部でも情報を適切に提供できるタッチポイントを構築することの重要性が明らかになりました。そのため、今後は外部タッチポイントの利用状況や閲覧データを分析し、その結果を踏まえて情報提供の方法やタイミングを改善することで、関係者への情報伝達の効果を高めていきます。また、公開講座やオンラインプログラム、研修などの機会を通じた広報活動も併せて行い、IDポータルの情報や学習機会をより多くの関係者に届けられる仕組みづくりを進めていきます。

さらに、IDについて学びたい・知りたいという人にとっての入口（ドア）となるウェブサイト、すなわちID情報の接続点として、より多くの方に本サイトを利用いただけるよう、次年度以降もプラットフォームの拡張を進めていきたいと考えています。

The screenshot shows the ID Portal website. The header has a yellow background with the 'IDポータル' logo and navigation links: 熊本大学, 大学院社会文化科学教育部, 教授システム学専攻. A search bar is on the right. Below the header is a blue navigation bar with links: ホーム, イベント, ID関連文献等一覧, IDマガジン, お悩み解決Q&A, 実力チェック, 作業支援ツール, 本サイトについて. The main content area has a yellow background with the text 'IDポータルへようこそ！' and a description of the site's purpose. The right sidebar contains a 'リンク' section with links to external resources and a 'おすすめ情報' section with recommended information.

直近イベント情報

- 2024年6月8日（土）
- 2024年8月24日（土）
- 2024年10月12日（土）
- 2024年12月21日（土）
- 2025年2月22日（土）
- [2024年度 まなばナイト](#)
- 2025年1月7日（火）～2025年3月3日（月）
- [デジタルラーニング・コンソーシアム eLP「コンテンツ開発技法」コース開講](#)
- 2025年2月3日（月）～2025年3月31日（月）
- [デジタルラーニング・コンソーシアム eLPベーシック・eラーニングコース「63期」開講](#)
- 2025年2月15日（土）～2025年2月16日（日）
- [情報処理学会 コンピュータと教育研究会 178回研究発表会@東京女子体育大学](#)
- 2025年2月16日（日）
- [日本教育メディア学会 2024年度 第2回研究会「学習者主体の学びとメディア活用／一般」@京都教育大学](#)
- 2025年3月1日（土）～2025年3月2日（日）
- [情報処理学会 コンピュータと教育研究会 179回研究発表会@大阪工業大学](#)
- 2025年3月6日（木）～2025年3月7日（金）

リンク

- [鈴木克明教授 Webサイト](#)
IDに関する著書や経歴、直近のスケジュールを掲載しています。
- [都竹茂樹教授Webページ](#)
経歴や連絡先などの情報がありません。
- [Yoshi Lab](#)
合田美子准教授の経歴や最新情報があります。
- [教授システム学専攻同窓会](#)

おすすめ情報

教授システム学専攻の公開科目でIDの基礎を学習できます。おすすめ科目は以下で

図：IDポータルウェブサイト：トップ画面

コンテンツ一覧

IDポータルは、教授システム学専攻の同窓生をはじめ、多くの関係者にご協力いただきながら、以下のコンテンツを提供しています。

コンテンツ カテゴリ名	内容
イベント	IDに基づいた研究・実践が発表される学会・研究会（日本教育工学会、教授システム情報学会、ICoME等）や、IDについて学習できるワークショップ（熊本大学公開講座等）について、随時、配信しています。
ID関連文献等	IDに基づいた研究・実践についてまとめた論文や学会報告を随時、掲載しています。
IDマガジン	IDと関連するブックレビューや熊本大学教授システム学専攻主催の「まなばナイト」等のイベントのレポートを事前登録者に対して配信、サイトへ掲載しています。尚、IDマガジンは、熊本大学教授システム学専攻の同窓生有志で構成される「IDマガジン編集委員会」によって長年、企画・運用されています。
お悩み解QandA	eラーニング・授業・研修をデザインする際に出てくるありがちなお悩みをレイヤーモデル（eラーニング、授業、研修等の質を5つの段階に分けて整理したもの）の5つのレベルごとに分類しています。「学習目標の種類によって、どんな学び方、教え方をすれば効率的か」や「知識やスキルではなく、望ましい態度を教えたい」等について、IDの観点からの解決策や関連するリソースを提供しています。
実力チェック	教授システム学専攻必修科目「インストラクショナル・デザインI」を題材に、架空の教材企画書が提示され、学習目標や事前/事後テストの内容、前提条件等の各項目の適a切性を評価する活動を通じて、授業設計に関する知識・スキルを身につけているか判断できます。
作業支援ツール	教授システム学研究センター／教授システム学の鈴木克明教授が執筆し、多くの人に利用されている以下の4つの書籍で紹介されている授業設計のための作業を支援するための機能・資料が提供されています。 1. 教材設計マニュアル 2. 授業設計マニュアル 3. 研修設計マニュアル 4. 学習設計マニュアル

次の表「IDマガジンの発行数、イベント掲載、業績登録数」は、本年および過去のIDマガジン発行数、ID関連のイベントの掲載数、ID関連の業績の登録数を一覧にまとめたものです。大きな変化はありませんが、コンスタントにそれぞれのコンテンツが登録されています。こうした地道で丁寧な情報発信を継続して続けていくこととしています。業績については現在集計中です。

表：IDマガジンの発行数、イベント掲載、業績登録数

No	項目	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度
1	IDマガジンの発行数	9	13	13	13	12	13
2	イベントの掲載数	49	45	48	54	39	45
3	登録された業績の件数	114	61	68	66	70	※60

※2025年度の一部業績（修士論文数を含む）については現時点では未集計のため、本集計には含まれていない。確定後、次年度の報告書において反映した件数を掲載予定である。

サイトおよび各コンテンツへのアクセス数

以下に示すように、IDポータルは日々、多くの方にアクセス・利用されています。2025年度のアクセス数は集計中です。

表：月毎のサイトへのアクセス数

月（2025年）	ユーザー数	訪問数
4月	381	1034
5月	457	1323
6月	442	1138
7月	414	1078
8月	372	1010
9月	342	902
10月	360	932
11月	390	1069
12月	327	946
1月	341	1328
2月	246	750
3月	262	933

ユーザー調査

2026年2月～2026年3月に、IDポータルに関するユーザー調査を行いました（有効回答数9件）。

IDポータルへのアクセスを通して「IDについて情報を得る」という目的の達成度については、8名が「達成したと思う」または「少し達成したと思う」と回答しており、最も高い数値を示しました。一方で、「業務や授業での悩みを解決するため」という項目では肯定的な回答が44%にとどまり、「研究のアイディアを得るため」や「IDに関連するイベントの情報を得るため」といった項目については、肯定的な回答は比較的低い水準となりました。

これらの結果から、現状ではIDポータルを主に情報収集の手段として利用している利用者が多いことがうかがえます。今後は、より多様な目的で活用されるプラットフォームとなるよう、IDポータルの広報活動を進めるとともに、利用者や受講者のニーズについても継続的に調査・分析を行い、コンテンツや情報提供の充実を図っていきます。

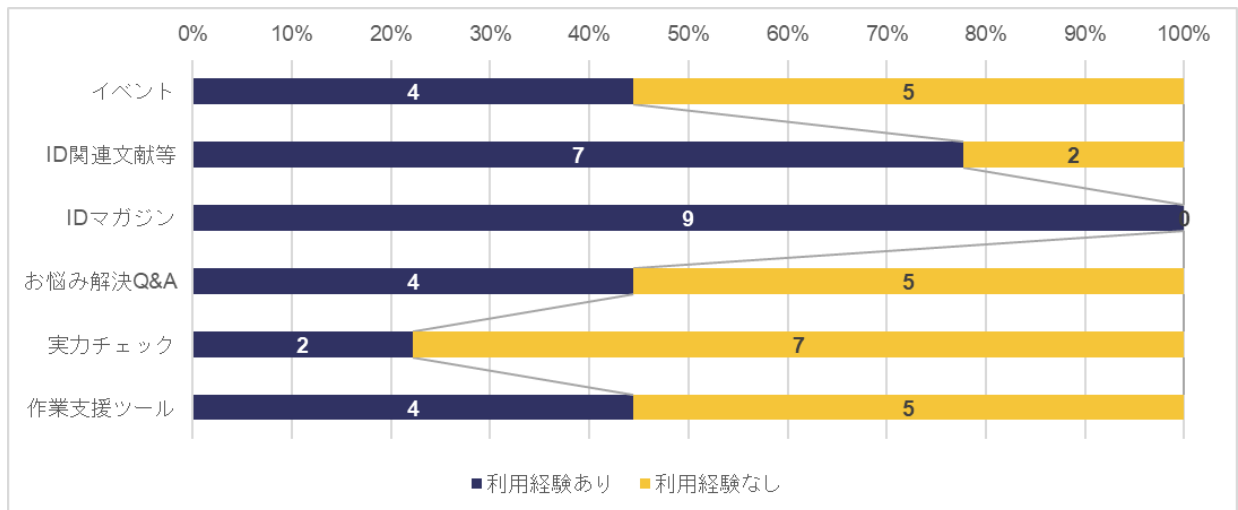
表：IDポータルへアクセスした目的とその達成度（IDポータルに関するアンケート）

	本項目は目的ではなかった	達成したと思う	少し達成したと思う	どちらとも言えない	あまり達成しなかったと思う	達成しなかったと思う
IDについて情報を得るため	0	6	2	0	1	0
業務や授業での悩みを解決するため	0	1	3	1	3	1
研究のアイディアを得るため	1	0	1	5	1	1
IDに関連するイベントの情報を得るため	2	2	1	3	0	1

回答者のコンテンツごとの利用経験は以下のとおりです。IDマガジンやID関連文献といったコンテンツについては、それぞれ100%、78%の回答者が「利用経験あり」と回答しました。これらは比較的更新頻度が高く、気軽に閲覧できる内容であることが影響していると考えられます。今後は、こうしたコンテンツを入口として、お悩み解決Q&A、実力チェック、作業支援ツールなど他のコンテンツへの遷移を促す施策も有効であると考えられます。

表：IDポータルで利用経験のあるコンテンツ（IDポータルに関するアンケート）

	イベント	ID関連文献等	IDマガジン	お悩み解決Q&A	実力チェック	作業支援ツール
利用経験あり	4	7	9	4	2	4
利用経験なし	5	2	0	5	7	5
合計	9	9	9	9	9	9



インストラクショナルデザインの認知を広げていくためには、熱心なユーザだけでなく、登録以前の段階にあるライトなユーザにもリーチし、そうした層が徐々に熱心なユーザへと移行していくような施策が必要となります。IDマガジンは、登録者に対してプッシュ型で情報を配信できる機能を備えており、ユーザが定期的にIDポータルを訪問しなくても情報を届けられる点がメリットです。今後も幅広い新規ユーザにリーチし、IDポータルの閲覧をきっかけに「IDマガジンを購読してみよう」と思ってもらえるような工夫が求められます。

また、IDポータル内のコンテンツの連携を意識しながら広報活動を進めることで、まずライトなユーザとして関わってもらい、そこから徐々にインストラクショナルデザインへの関心を深めてもらうという流れを意識した広報戦略が必要であると考えられます。

共同利用拠点事業③

公開科目

本センターでは、教授システム学専攻の大学院科目の一部をウェブサイトで公開し、一般の方々にも、広く学修の機会を提供しています。

本年度の取り組みの概要

現在、7科目9コースを公開科目として提供しています（科目名等は下記「公開科目一覧」を参照のこと）。本年度は、新コースのリリースはありませんでしたが、昨年に引き続き、コースの内容を広く知らせるために、SNS（Facebookページ）を活用して、告知を進めています。

公開科目一覧

【博士前期課程】

特別研究Ⅰ（2007年度版）：日本語版・英語版

研究の第一段階に位置づけられた科目

基盤的教育論（2007年度版）：日本語版・英語版

教員免許課程における教育原理・教育方法論・教育心理学のエッセンスと教授設計理論の基礎について短期間でカバーできる科目

eラーニング概論（2009年度版）：日本語版・英語版

eラーニングを教育に導入するための基礎科目

基盤的情報処理論（2010年度版）：日本語版・英語版 （2016年度版）：日本語版・英語版

eラーニング教材の開発に必要な情報処理基礎知識（特にWeb活用）の修得を目指す科目

インストラクショナル・デザインⅡ（2014年度版）： 日本語版・英語版

eラーニングを組み入れた教授システムの青写真と導入プロセスの提案、現状システムの改善計画の提案ができるようになることをめざす科目

経営学特論（2016年度版）：日本語版

企業・組織内の人材育成や教育について構想・企画・検討するための基礎を培う科目

【博士後期課程】

教授システム学研究総論（2015年度版）：日本語版・英語版

博士後期課程の導入科目として位置づけられた科目

公開科目サイトへのアクセス状況

公開科目サイト <https://kyoten2.cica.jp/moodle/> に対するアクセス状況は以下の通りです。

表：月毎の公開科目サイトへのアクセス数

月（2025年）	ユーザー数	訪問数
4月	84	223
5月	73	130
6月	63	120
7月	55	161
8月	48	82
9月	40	66
10月	62	217
11月	44	92
12月	43	90
1月	35	46
2月	27	60
3月	37	96

共同利用拠点事業④ 講師派遣

本センターではインストラクショナル・デザインについて学ぶ機会を
提供するために、講師派遣をしています。

「講師派遣」本年度の取り組み概要

昨年度に引き続き「FD研修講師・大学教育設計コンサルタント派遣」の継続・拡大を図りました。他の取り組みとも連携しつつ、可能な限り、受講者参加型のFD研修を実施しました。本年度は、コロナ禍以前のように対面で集合して行う研修が増えましたが、昨年度同様に、対面とオンラインを組み合わせたブレンド型の研修も多く実施しました。ブレンド型研修のオンライン研修では、同期で実施するもの、非同期でオンデマンドの動画を提供し事前に質問を受け付け、当日の質問と合わせ回答しながら進める研修や、ビデオ会議システムの小グループ用会議室機能を活用した受講者間での協調学習などを含む多様な形態で提供しました。また、受講者に対し、研修前後の非同期学習を体験してもらうことで、自己調整学習を意識した授業設計と実施を促進するためのFDに寄与しました。

講師派遣として本拠点所属教員として、4名の半導体・デジタル研究教育機構教授システム学教育実践力開発拠点の教員が、講師として、大学教職員対象の研修を13件、その他を対象とした研修を8件のべ、21件行いました（表1参照、3月に2件予定有り、3月実施予定分を含まない）。昨年度は、所属教員を講師として大学教職員対象の研修を10件、その他を対象とした研修を9件、のべ19件でした。昨年度と比較すると、研修数は微増しました。

一方で、一昨年度より名誉教授となった元所属教員による研修数は41件でした（表2参照、3月6日以降に3件予定有り、3月6日以降実施予定分を含まない）。以下でご報告する受講者数は名誉教授による講師派遣を含みませんが、小規模な研修から規模の大きな講演まで、対象者としては大学教職員、大学院生、医療関係者や一般の方などを対象とし、多様な研修を行いました。

本年度の大学教職員対象の研修では、のべ528名が本拠点所属教員の研修を受講しました。

一般・その他の研修では、対象者を設定していない一般を対象とした研修、その他として、専門学校教員、医療関係者対象の研修について整理しました。一般・その他の受講者は198名で、本年度の所属教員による講師派遣の全受講者数は、724名でした。

所属教員と名誉教授による研修の内容は、授業設計、教材設計はもちろん、人材育成、学習環境と学習経験、言語教育や生成AIの利用等、多岐に渡りました。研修の規模も、10数名の研修から、150名を超える研修がありました。主催者も、大学だけでなく、企業、各種財団、学会等で、それぞれの団体のミッションや課題に合わせ、研修を行いました。

また、本年度は、昨年度に引き続き、講師派遣事業の業績向上を目指し、「熊本大学 eラーニング連続セミナー」としてセミナーを1回開催しました（表3参照）。オンライン協調学習やSTEM教育、人工知能等の専門性を持つ国内外の著名なeラーニングの専門家の講師を招き、eラーニングを活用した教育実践、大学教育、授業改善に寄与し、本拠点所属教員の研鑽も目的とするセミナーを開催しました。対面とオンラインを併用するハイブリッドな開催で、1回のセミナーの参加者数は44名でした。この連続セミナーは、熊本大学半導体・デジタル研究教育機構附属情報統括センターeラーニング推進室のウェブサイトで告知し、IDの普及や当該セミナーの内容を知る契機となるよう、積極的な情報発信に努めています（図1）。



図1：eラーニング連続セミナー参加者募集を告知するウェブサイト

昨年度は、本章末尾に掲げる「講演型FD研修会を脱却するための研修モデルについてのご提案（2021.3）」を説明をし、講師派遣をPRするYouTube動画を作り、公開しました（図2）。このYouTube動画の公開はFacebookページでも紹介しました（図3）。本拠点の講師派遣活動について、広く認知を得られるよう、広報活動の充実をはかりました。

本年度も、依頼者のニーズに合わせ、受講者がより能動的で積極的に参加できる研修を提供してきました。次年度も、さらに、受講者が自ら学ぶ研修、研修後も学び続けられるような研修を提供していきたいと考えています。また、今後も、定年退職し、専攻の客員教授とされた、多様な専門性を持つ有識者の協力を得ながら、講師派遣の更なる充実を図りたいと考えています。

図2：講師派遣をPRするYouTube動画（GSIS-TV）（<https://youtu.be/RQn1NZID2bM>）



図3：講師派遣をPRするYouTube動画を告知するFacebookページ投稿

表 1：講師派遣の事例（本拠点所属教員による）

研修日	講師	研修主催者	研修名	研修場所 (オンラインは同期)
2025/6/9	合田美子	認知症介護研究・研修仙台センター	認知症介護指導者養成研修	認知症介護研究・研修仙台センター
2025/6/30	川越明日香	熊本大学ファカルティ・ディベロップメント委員会	熊本大学FDワークショップ	くすの木会館 レセプション ルーム（熊本 大学黒髪北 キャンパス）
2025/7/9	川越明日香	女子栄養大学	女子栄養大学 FD研修会	女子栄養大学
2025/8/21	川越明日香	全国保健師教育機関協議会	公衆衛生看護学を教授する 教員＜ラダーⅠ＞研修「教育評価」	日本教育会館
2025/8/21	川越明日香	全国保健師教育機関協議会	公衆衛生看護学を教授する 教員＜ラダーⅠ＞研修「教育方法」	日本教育会館
2025/9/5	川越明日香	日本養護教諭養成大学協議会	20周年記念行事 第4分科会	きゅりあん (東京都品川 区立総合区民 会館)

2025/9/11	川越明日香	熊本保健科学大学	2025年度 熊本保健科学大学 FDセミナー	熊本保健科学 大学
2025/9/22	喜多敏博	熊本大学ファカルティ・ ディベロップメント委員会	2025年度 熊本大学FD講演 会	熊本大学 くす の木会館、オ ンライン
2025/9/25	合田美子	全国専門学校教育研究会	令和7年度文部科学省委託事 業 授業改善サポーター養 成講座 オリエンテーショ ン	オンライン
2026/9/27	合田美子	日本教育工学会国際委員会	国際シンポジウム「新たな 価値を創造する研究の国際 化：はじめての国際会議か ら継続的な国際共同研究ま で」	ウインクあい ち（名古屋）
2025/10/6	合田美子	認知症介護研究・研修仙台 センター	認知症介護指導者養成研修	認知症介護研 究・研修仙台 センター
2025/10/7	合田美子	全国専門学校教育研究会	令和7年度文部科学省委託事 業 授業改善サポーター養 成講座 研修1	デジタルハリ ウッド大学
2025/11/4	合田美子	全国専門学校教育研究会	令和7年度文部科学省委託事 業 授業改善サポーター養 成講座 研修2	オンライン
2025/11/4	川越明日香	熊本大学ダイバーシティ推 進室	令和7年度女性研究者日帰り 研修	熊本城ホール
2025/11/14	合田美子	会津大学短期大学部	FD研修会	オンライン
2025/11/25	川越明日香	熊本サイエンスコンソーシ アム	令和7年度KSC第2回担当者 会議	熊本県立第二 高等学校
2025/12/1	合田美子	全国専門学校教育研究会	令和7年度文部科学省委託事 業 授業改善サポーター養 成講座 研修3	オンライン
2025/12/16	川越明日香	熊本大学ファカルティ・ ディベロップメント委員会	熊本大学FD 授業支援ワーク ショップ	くすの木会館 レセプション ルーム（熊本 大学黒髪北 キャンパス）
2025/12/19	久保田真一郎	九州プライバシーマーク審 査センター	2025 年度 K P J C 審査員研 修会	TKP ガーデン シティ ネス トホテル熊本
2026/3/5	川越明日香	埼玉県立大学	埼玉県立大学FD研修会	埼玉県立大学
2026/3/16	川越明日香	琉球大学	琉球大学FD講演会	琉球大学

表2：講師派遣の事例（名誉教授による）

研修日	講師	研修主催者	研修名	研修場所 (オンラインは同期)
2025/4/26	鈴木克明	日本医療教授システム学会	2025医療ID・実践事例研究会	東京スクエア ガーデン、オン ライン
2025/4/27	鈴木克明	日本医療教授システム学会	GOLDメソッド認定講座（入 門編）2025	東京スクエア ガーデン
2025/5/10	鈴木克明	日本医療教授システム学会	GOLDメソッド認定講座（入 門編）2025	東京スクエア ガーデン
2025/5/11	鈴木克明	日本医療教授システム学会	GOLDメソッド認定講座（応 用編）2025	東京スクエア ガーデン
2025/5/31	鈴木克明	熊本大学大学院教授システム 学専攻	熊本大学大学院教授システ ム学専攻 開講20周年記念シ ンポジウム	東京コンファレ ンスセンター品 川
2025/6/4	鈴木克明	サンライトヒューマンTDMC (株)	LPDカンファレンス2025	神田明神ホール
2025/6/7	鈴木克明	日本医療教授システム学会	学会主催フォーラム：現場 から生まれた医療教育知－ 医療教授システム学の誕生－	京都大学百周年 記念ホール
2025/6/15	鈴木克明	別府大学看護学部	別府大学看護学部開設記念 講演会「自律的な看護専門 職の人材育成への提言」	J：COMホルト ホール大分
2025/6/28	鈴木克明	日本医療教授システム学会	医療ID・実践事例研究会	沖縄県大浜第一 病院、オンライ ン
2025/6/28	鈴木克明	日本医療教授システム学会	GOLDメソッド認定講座（入 門編）2025	沖縄県大浜第一 病院
2025/6/29	鈴木克明	日本医療教授システム学会	医療ID・実践事例研究会	沖縄県大浜第一 病院、オンライ ン
2025/7/12	鈴木克明	日本医療教授システム学会	GOLDメソッド認定講座（応 用編）2025	京都光華女子大 学
2025/7/23	鈴木克明	山梨学院大学	2025年度 山梨学院大学全学 FD研修会	山梨学院大学
2025/8/9	鈴木克明	日本医療教授システム学会	医療ID・実践事例研究会	岡山理科大学、 オンライン
2025/8/10	鈴木克明		『新しい学びのデザイン－ 多重課題シミュレーション －』フォーラム	岡山コンベン ションセンター
2025/8/20	鈴木克明	情報処理学会	情報処理学会 情報教育シン ポジウムSSS2025	武蔵野大学有明 キャンパス

2025年教授システム学教育実践力開発拠点年次報告書

P.41

2025/8/24	鈴木克明	日本医療教授システム学会	GOLDメソッド認定講座（入門編）2025	北海道札幌市 吉田学園医療歯 科専門学校
2025/9/6	鈴木克明	日本医療教授システム学会	医療IDセミナー2025	東京スクエア ガーデン
2025/9/7	鈴木克明	日本医療教授システム学会	医療IDセミナー2025	東京スクエア ガーデン
2025/9/27	鈴木克明	（一社）日本救急救命士会	救急救命士の集い2025	AP名古屋
2025/9/30	鈴木克明	MBK Wellness株式会社 サイ コム・ブレインズ事業本部	【人材開発アカデミア】理 論と実務を結ぶ“教授・有識 者リレー”シリーズ	オンライン
2025/10/11	鈴木克明	日本医療教授システム学会	医療ID・実践事例研究会	京都光華女子大 学、オンライン
2025/10/23	鈴木克明	公益財団法人全国市町村研修財団 市町村職員中央研修所	新時代における地方公務員 の人材育成・確保	市町村アカデ ミー（幕張、千 葉）
2025/10/30	鈴木克明	MBK Wellness株式会社 サイ コム・ブレインズ事業本部	【人材開発アカデミア】理 論と実務を結ぶ“教授・有識 者リレー”シリーズ	オンライン
2025/11/7	鈴木克明	別府大学看護学部	別府大学看護学部公開講座	別府大学亀川 キャンパス（大 分県別府市）
2025/11/8	鈴木克明	日本医療教授システム学会	GOLDメソッド認定講座（入 門編）2025	別府大学亀川 キャンパス
2025/11/9	鈴木克明	日本医療教授システム学会	放送教育SIG第1回研究会 「放送教育の温故知新」	オンライン
2025/11/17	鈴木克明	九州看護福祉大学 FD委員会	九州看護福祉大学FD研修会	九州看護福祉大 学
2025/11/22	鈴木克明	日本医療教授システム学会	医療ID・実践事例研究会	広島県立二葉の 里病院、オンラ イン
2025/11/23	鈴木克明	日本医療教授システム学会	医療IDセミナー2025	広島県立二葉の 里病院
2025/12/12	鈴木克明	日本医療教授システム学会	GOLDメソッド認定講座（入 門編）2025	千葉大学医学部 附属病院
2025/12/13	鈴木克明	日本医療教授システム学会	医療ID・実践事例研究会	東京スクエア ガーデン、オン ライン
2026/1/13	鈴木克明	デジタルラーニング・コン ソーシアム	DLC「生成AI×人材育成研究 グループ」第1回研究会	MBK Wellness株 式会社 サイコ ム・ブレインズ ラーニングセン ター

2026/1/17	鈴木克明	日本教育メディア学会	放送教育SIG第3回研究会	オンライン
2026/1/24	鈴木克明	日本医療教授システム学会	GOLDメソッド認定講座（入門編）2025	ウインクあいち
2026/1/25	鈴木克明	日本医療教授システム学会	医療IDセミナー2025	ウインクあいち
2026/2/21	鈴木克明	日本医療教授システム学会	医療ID・実践事例研究会	岩手県立大学アイーナキャンパス、オンライン
2026/2/22	鈴木克明	日本医療教授システム学会	医療IDセミナー2025	岩手県立大学アイーナキャンパス
2026/2/26	鈴木克明	三條市立大学	三條市立大学FDセミナー	三條市立大学
2026/2/27	鈴木克明	一般社団法人日本PDA製薬学会	インストラクショナルデザイン (ID)の導入による習得主義教育への転換	AP新橋
2026/3/5	鈴木克明	東京都立産業技術大学院大学	第39回FDフォーラム	オンライン
2026/3/13	鈴木克明	名古屋大学総合医学教育センター	指導医のための医学教育学プログラム「FCME」Foundation;Course for Medical Education	湘南国際村センター
2026/3/20	鈴木克明	日本医療教授システム学会	第18回 日本医療教授システム学会 総会・学術集会	自治医科大学
2026/3/21	鈴木克明	日本医療教授システム学会	GOLDメソッド認定講座（入門編）	自治医科大学

表3： 国立大学法人熊本大学eラーニング連続セミナー実行委員会主催のセミナー

研修日	講師	研修名	講演タイトル	研修場所 (オンラインは同期)
2025/5/30	Wanju Huang博士	第41回 熊本大学 eラーニング連続セミナー	教育におけるアニメーション・AR・VRの活用 Using Animations, Augmented Reality, and Virtual Reality in Education	熊本大学、オンライン
2026/3/19	Denis Gillet博士	第42回 熊本大学 eラーニング連続セミナー	生成AI時代の学習支援・Learning Support in the Era of Generative AI	熊本大学、オンライン

派遣事例1

講師派遣事例

講師： 合田美子

実施日： 第1回 2025年6月9日（月） 14:00～17:00

第2回 2025年10月6日（月） 14:00～17:00

場所： 認知症介護研究・研修仙台センター（宮城県仙台市）

研修名： 認知症介護指導者養成研修「成人教育論」

参加者： 各回 約20名

2025年6月9日および10月6日、認知症介護研究・研修仙台センターにて開催された認知症介護指導者養成研修において、「成人教育論」の講義・演習を担当しました。本研修は、地域で認知症介護の実践研修を担う指導者の育成を目的とした全国的な研修プログラムの一環として実施されたものです。受講者は主に介護施設等でリーダーや管理職として実務に携わる職員であり、日々の現場指導を担う立場から、教育的関わり方を体系的に学ぶことを目的として参加しました。

講義は最小限にとどめ、演習を中心に行いました。成人学習理論を基盤として、成人学習者の特徴、教育者の役割と倫理、学習支援の方法について簡潔に解説しました。参加者とインタラクティブに意見交換をしながら、学校教育との違いを踏まえ、成人は自身の経験や課題意識を起点に学ぶ存在であることを確認し、知識を教えるのではなく学びを支援する教育観の重要性を共有しました。あわせて、インストラクショナルデザインの視点から、学習者のニーズや動機、現場課題を踏まえて研修を設計する必要性についても紹介しました。

また、演習では、認知症介護の現場で実際に起こり得る対応困難事例や指導上の悩みを題材として取り上げ、グループワークを中心に進めました。受講者同士がそれぞれの経験を持ち寄り、対応の背景にある考え方や価値観を言語化しながら対話を行いました。経験を振り返り、理論と結び付け、次の実践に活かすという学習サイクルを体験することで、単なる知識理解にとどまらない学びを実感できる構成としました。

さらに、うまくいかなかった経験を学習資源として捉え直す視点を提示し、失敗事例を安全に共有できる学習環境づくりの重要性についても議論しました。参加者は、自身の指導場面を想定しながら、問いかけ方やフィードバックの方法を検討し、指導者としての関わり方を具体的に考察しました。

さらに、対話を基盤とした学習コミュニティの形成やファシリテーションの役割についても扱い、教える人と学ぶ人という一方向の関係ではなく、相互に学び合う関係を構築する視点を共有しました。これにより、受講者が地域で行う実践研修において、学習者の主体性を引き出す支援方法を構想する機会を提供しました。

本研修を通して、認知症介護の現場における人材育成では、知識伝達型の指導だけでは十分ではなく、経験を基盤とした省察と対話を支援する教育が重要であることが確認されました。成人の学びの特性を踏まえた研修設計が、現場の実践力向上と指導者の成長の双方に寄与することが期待されます。今後も、成人学習の視点に基づく教育実践の普及を通じて、現場に根ざした指導力向上に貢献できればと思います。

派遣事例2

講師：川越明日香

実施日：2025年8月21日（木）14:10～15:40、15:50～17:20

場所：会場（日本教育会館）

研修名：全国保健師教育機関協議会 公衆衛生看護学を教授する教員＜ラダーⅠ＞研修
「教育方法」「教育評価」

参加者：約35名

2025年8月21日（木）に日本教育会館（東京都千代田区）で開催された全国保健師教育機関協議会 公衆衛生看護学を教授する教員＜ラダーⅠ＞研修の「教育方法」と「教育評価」の講師を担当しました。

この研修は、全国保健師教育機関協議会が主催する、実務経験の浅い教員（ラダーⅠ）を対象とした実習・授業指導力を養うもので、2年間で6日間のカリキュラム（講義・演習）を通じて、効果的な教育方法や指導計画の立案・評価の基礎を学びます。日本公衆衛生学会の認定研修として位置付けられています。

前半の「教育方法」では、まず社会の変化や保健師教育を取り巻く状況を踏まえ、従来の知識伝達型の授業から、学修者が主体的に学ぶ授業への転換が求められていることを共有しました。その上で、授業設計の基本として、到達目標から評価方法・教授方法を逆算して組み立てる「逆算型授業設計」の考え方を解説しました。

具体的には、「学生が授業を通して何をできるようになるべきか」を起点に、学修活動を設計する重要性を確認し、参加者自身の授業目標や授業計画を見直すワークを行いました。

後半の「教育評価」では、学修者本位の教育の実現に向けて、学生の学修成果をどのように可視化し、適切に測定するかを中心テーマとしました。

まず評価の目的として、学修を促進すること、到達度を確認すること、授業改善につなげることなどを整理した上で、評価主体・評価対象・評価基準・評価方法といった構成要素を体系的に説明しました。

さらに、測りにくい能力を評価する方法として、複数の観点で学修成果を捉えるルーブリック評価を紹介し、課題ルーブリックや科目ルーブリックの具体例をもとに、実際に学生のレポート課題をルーブリックで評価してみろというワークを行い、理解を深めました。

公衆衛生看護学は、地域の健康課題を統合的に捉え、保健師としての実践力を育成する中核的な学問領域です。その教育を担う教員には、専門知識だけでなく、学生の学びを支える授業設計力と評価力が求められます。

本研修は、実務経験の浅い教員にとって、到達目標に基づく授業づくりや学修成果を適切に評価する方法を体系的に学ぶ貴重な機会となっています。学生の成長を支援する立場として、今後の保健師養成教育の質保証に寄与することを期待しています。



講演型FD研修会を脱却するための研修モデルについてのご提案（2021.3）

本センターでは、これまでにFD研修講師派遣を依頼頂いた際に、様々な形の研修を提言してきました。外部講師としての依頼を受け、講演をした後で、質疑応答の時間を最後に取り、という従来型のものもありましたが、他のやり方はどうでしょうか、という提案をした結果、それを受け入れていただき、効果が上がったケースもありました。これまでの経験をもとに類型化した研修モデルには、以下のようなものがありました。

<外部講師講演型>

重要だと思われるトピックの第一人者を招聘して行うFD。例えば、アクティブラーニング、パフォーマンス評価、オンライン授業など。講師によっては、新しいコンセプトを事例に即して知る機会になることもあるが、力量に依存するので、「お勉強」に留まり実際の授業改善には直結しない場合も散見される。講演の最後には質疑応答の時間を設ける場合もあるが、質問があまり活発に出ずにFD担当者が困るケースも多い。

<事前質問付外部講師講演型>

外部講師を派遣する際に、事前に質問を受講予定者から募り、その回答を含めた講演にしてもらう。講演時間の半分程度を講演にあて、残りの時間を事前質問への回答にあててもらうのが効果的。ケースによっては、事前質問への回答を最初にしてから、まとめの講演というパターンがより講演を身近に感じられ、満足感を高めることもある。

<事前資料付講演（反転授業型）>

基本的な内容については事前に論文や講義ビデオで情報を得てもらい、その上で当日の講演に臨んでもらう。可能であれば、事前資料についての質問を事前にあるいは参集時に受付で出してもらう。講演時間は事前資料の内容についての質疑応答を中心に構成するか、ワークショップ的に例えば「事前資料の内容を今後の担当授業にどう応用するか」を検討する時間とする。担当科目でもこの形式（反転授業）を採用してもらう布石として学習者として体験してもらう意図も兼ねて行う。

<講演型＋アクションプラン作成>

次回にアクションプランをどう実現したかをシェアする会を設定・予告し、それまでに活用することに誘う。新しいコンセプトを導入した後で、個人あるいはグループ（担当科目やカリキュラムを共有する者同士）で、このコンセプトをどのように活用して授業を改善できそうかを検討・議論し、アクションプランを作成する（次回のFDまで、今年度中、2－3年後までには、など）。

<事前課題＋アクションプラン作成>

FD開始前に授業改善のヒントとなるような文章を全員が読んで、疑問点や自分の授業改善にどのように活用できそうかを検討した結果を持ち寄ってもらう方式。集まった時には疑問点を解消した後で、各自の検討結果を共有し、互いに気づいてなかった点を加えてアクションプランを作成して、次回につなげる。

<まな板の鯉方式>

これまでに様々な工夫をして授業改善に取り組んできた教員の事例を紹介してもらい、自分の授業で参考になる点（まねできそうな点）や更なる改善アイデアについて小グループで話し合い、授業提供者が持ち帰るお土産とする。例えば、ICT活用法、遠隔授業構成法、学習意

欲を高める方策などのテーマを設定し、関連する工夫を数例並べて検討するとさらに効果が高まる。

＜ワークシート形式＞

各自が担当する授業について共通のフォーマットを用いて現状分析し、改善の糸口を見つける方式。ARCSで学習意欲を向上する、大学の授業点検シートで出入口と方略をチェックするなど。ワークシートへの記入を事前課題として記入済みのものを持ち寄って議論中心に展開すると効率的になる。さらにアクションプラン作成と組み合わせで次回につなげることも効果的。代表的な取り組みを次にまな板の鯉方式で共有することにつなげる前段階としての活用するのもよい。

＜他のやり方＞

本センターでは、講師派遣に際して、その他にも有効だと思われるやり方を模索していきたいと考えています。遠慮なくご相談ください。

共同利用拠点事業⑤ オンラインプログラム

本センターでは2019年から、
授業設計について学習するオンラインプログラム
「教育改善スキル修得オンラインプログラム」
を公開・運用しています。



https://youtu.be/JSG5rIS_jZI

2024/08/07 | イベント

人文・社会 / 教育工学

【熊本大学】授業改善のお悩み解決します！！オンラインプログラム『科目デザイン編』有料版受講者（第11期）募集開始

山下 藍 鈴木 克明 喜多 敏博 合田 美子

この度、熊本大学では、「教育改善スキル修得オンラインプログラム（科目デザイン編）」の有料版受講者（第11期）を募集いたします。

高等教育機関において、授業を改善したい、もっと効果的な授業にしたい、授業設計の基礎を身につけたいなど、授業に関する様々なお悩みを解決します。皆様の応募を心よりお待ちしております。

<https://kyoten1.cica.jp/moodle/>

- ◆対象者：高等教育機関の現役教員、または、大学院生など将来的に高等教育に携わる予定の者
- ◆定員：15名（2024年度）
- ◆受講料：60,000円（履修証明書の発行手数料を含む）

◆学習期間

2024年11月22日（金）～2025年3月19日（水）までの任意の60時間

* 2024年12月15日（日）と2025年2月23日（日）に対面／同期型研修があります。

* 上記の対面／同期型研修は現地参加（東京）とオンライン参加が選択できます。

* 詳細は以下をご覧ください。

<https://www.gsis.kumamoto-u.ac.jp/2024onlineprogram04/>

◆募集期間：

2024年8月7日（水）～9月20日（金）

* 募集締切後に審査の上、受講者を決定・通知します。

◆申し込み：

<https://forms.gle/j67ZM5chXVKV5VvE7>

* 申し込みの際に担当科目の概要資料（フォーマット指定）を提出していただきます。

本プログラム修了者には、文部科学省の制度に基づいて履修証明書が発行されます。

図：科目デザイン編受講者募集を告知するresearchmapでのプレスリリース

「科目デザイン編」本年度の取り組み概要

本取り組みでは、高等教育機関の授業における学習目標の設定、評価方法、授業方法の設計に関する知識・スキルを習得することを目的としたオンラインプログラム（科目デザイン編）の運営を行っています。

本取り組みでは、基礎から積み上げる方式による暗記中心の専門家育成の枠組みを脱却し、学習の有用性を最初から実感できる科目デザインの実現を目指しています。このアプローチは、社会人の学び直しに有効であるとともに、社会人経験のない学生にとっても有用であることを前提としています。

本年度は有料版の第12期と第13期を募集し、7名の受講者が修了し、6名が今年度3月の修了に向けて学習に取り組んでいます。

教育改善スキル修得オンラインプログラム（科目デザイン編）

<https://kyoten1.cica.jp/moodle/>

また、科目デザイン編のコンテンツを活用した他大学でのプレFDやFD活動も実施されています。酪農学園大学では、プレFDの一環として大学院博士課程（獣医学研究科および酪農学研究科）の学生を対象に提供されており、東海大学では、プレFDや教職員のFD活動として、研究生や教職員に無料版での学習が推奨されています。

教育改善スキル修得オンラインプログラム（科目デザイン編）

ANNOUNCEMENTS undefined

ホーム画面

初めてアクセスされた方へ

本教材へようこそ。まず、右のボタンをクリックして、このプログラムの学習の進め方を一緒に確認しましょう。

学習の進め方

モジュール1：大学教育に関する5つの物語

モジュール1では、高等教育に関する5つの物語を紹介し、次世代の大学についての考え方を説明します。これまでの大学の常識を改めて見直し、新しい大学のイメージについて議論しましょう。

アクセスする

アカウントなしで閲覧可能

モジュール2：認知的発達を促す授業方法

モジュール2では、『バラレルセッション』や『一人でできることは授業ではやらない』といった学習者の認知的発達を踏まえた支援について学習します。

アクセスする

要ログイン

モジュール3：評価と単位認定の見直し

モジュール3では学習の評価について学習します。期末テストの成績が悪い、実技の授業をどのように評価すればよいのかといった問題について学習します。

アクセスする

要ログイン

モジュール4：学習目標の高度化

モジュール4では、学習目標について学習します。『暗記ではなく知識の応用を目指す』や『学問領域に依存しない学び方を学ぶ』といったトピックについて学習します。

アクセスする

要ログイン

ナビゲーション

ホーム画面へ戻る

進捗管理画面へ戻る

学習状況証明書を発行
(無料ユーザー向け)
証明書はいつでも発行可能

学習状況証明書を発行
(有料ユーザー向け)
有料ユーザーのみアクセス可能です。証明書はいつでも発行可能。

関連サイト

本プログラムは、熊本大学教授システム学研究センターが運営しています。

RCIS 教授システム学研究センター
Research Center for Instructional Systems

熊本大学大学院 Graduate School of Instructional Systems
社会文化科学研究科 教授システム学専攻

ご意見はこちら

本プログラムを学習していてお気づきの点、ご意見がございましたら、下記のボタンよりご連絡ください。

図：教育改善スキル修得オンラインプログラム（科目デザイン編）トップ画面

プログラムの学習内容（有料版と無料版）

オンラインプログラムでは、大学の授業設計について、主に学習目標・評価方法・授業方法の3点から学習します。学習した内容をもとに、受講者は自身が所属機関で担当している授業の改善・修正に取り組めます。また、ミネルバ大学の事例等を紹介しながら、今後の大学教育の在り方についても議論を行います。

無料版の学習者は、各モジュールで知識を学習するとともに、自身が学習内容をどの程度身に付けられたかを確認するためのクイズを受験することができます。

一方、有料版の学習者には、無料版の内容に加えて、自身の担当科目の修正案について他の学習者とディスカッションを行う機会や、教員による添削を受けられる課題提出の機会を提供しています。また、有料版の学習者を対象に2回の対面学習を実施しており、各回では、モジュール学習の過程で生じた疑問点を共有し、議論する機会を設けています。

各モジュールで学習を進めながら自身の担当科目を修正することで、本プログラム修了後には、改善された状態の科目を直ちに実施できるよう設計しています。

表：各モジュールの対象者及び内容

モジュール名	対象者	内容
オリエンテーション	有料版	各モジュールの学習を始める前に、学習環境の準備および自己紹介を行います。
モジュール1 大学教育に関する5つの物語	無料版 有料版	高等教育に関する5つの物語を紹介し、次世代の大学の在り方について解説します。あわせて、これまでの大学の常識を改めて問い直し、新しい大学像について議論します。
モジュール2 認知的発達を促す授業方法	無料版 有料版	『パラレルセッション』や『一人でできることは授業ではやらない』といった、学習者の認知的発達を踏まえた支援の在り方について学習します。
モジュール3 評価と単位認定の見直し	無料版 有料版	期末テストの成績が振るわない場合の対応や、実技科目をどのように評価すべきかといった、評価に関する課題について学習します。
モジュール4 学習目標の高度化	無料版 有料版	『暗記ではなく知識の応用を目指す』や『学問領域に依存しない学び方を学ぶ』といった観点から、学習目標の設定に関する課題について学習します。
モジュール5 最終課題	有料版	モジュール1からモジュール4までの学習内容を振り返り、それを踏まえて自身の担当科目の改善を行います。

アクセス数

2025年3月から2026年2月までのサイトへの訪問者数と、無料版プログラムを修了しデジタルバッジを取得した学習者の数を、以下に提示しています。

無料版プログラムを修了しデジタルバッジを取得した学習者は、近年と比較して増加傾向にあります。今後は、講座を知ったきっかけやサイトのアクセス状況を詳細に分析したうえで、広報活動を一層進め、無料版・有料版の受講者の獲得に努めていきます。

モジュール名	訪問者数（IPアドレス）				無料版プログラム： デジタルバッジ取得者数			
	2022	2023	2024	2025	2022	2023	2024	2025
モジュール1：大学教育に関する5つの物語	304	353	340	235	12名	11名	14名	15名
モジュール2：認知的発達を促す授業方法	38	46	37	32	5名	4名	6名	13名
モジュール3：評価と単位認定の見直し	23	28	20	21	6名	5名	7名	14名
モジュール4：学習目標の高度化	22	29	19	22	4名	5名	6名	14名

有料版プログラム

有料版では、各モジュールの学習を進めながら、所属機関で実際に担当している科目（大学院生の場合は、将来担当を希望する科目）を改善していきます。有料版プログラムには、以下の特徴があります。

<特徴1：相互レビューに基づく学習>

本プログラムでは、各モジュールで提出される課題について、学習者同士の相互レビューを実施しながら、継続的な質の改善を行っています。

<特徴2：ポートフォリオの活用>

本プログラムでは、各モジュールで提出する課題や自身の担当科目のシラバス等をポートフォリオとして整理・蓄積する支援を行っています。作成したポートフォリオは、相互レビューや対面ワークショップ等を通じて他の学習者と共有します。最終的には、ポートフォリオを誰でも閲覧可能な形で公開できるようにし、発行される履修証明書とあわせて、学習者自身のキャリア形成や実践のアピールに活用していただくことを想定しています（公開は任意）。

<発行される証明書>

本プログラムでは、すべての学習を修了し、最終期限日までに所定の要件を満たして合格した場合、文部科学省の履修証明制度に基づき、熊本大学より履修証明書（紙媒体およびデジタル媒体）が発行されます。なお、学習途中であっても（無料版を含む）、学習状況証明書（デジタル媒体）の発行が可能です。ただし、こちらは文部科学省の履修証明制度に基づくものではありません。

また、履修証明書（デジタル媒体）には、本プログラムで作成を支援するポートフォリオへのリンクを任意で埋め込むことができます。これにより、将来的に自身の学習成果や教育実践を対外的にアピールする際の資料として活用することが可能です。



図：履修証明書（デジタル版）

受講後アンケート調査の結果

教育改善スキル修得オンラインプログラム 科目デザイン編の受講後アンケートは、第12期・第13期（修了者13名のうち12名【バッジ取得者のうち92.3%】）および受講後1カ月後アンケート第12期（修了者7名のうち2名【バッジ取得者のうち28.5%】）において実施しました。

以下では、1)～5)の設問に対する回答をまとめています。

1) オンラインプログラムの印象について

オンラインプログラムの内容について注意、関連性、自信、満足度の度合いについて7段階で回答を求めました。

注意については、全ての受講者が肯定的な回答を行い、その理由に関して、「新たな考え方や視点を知ることができたり、LMSの体験をすることができたため」、「自分が教えてきた中で、考えたことがないけれど重要な視点や気づきを得ることができたため」、「自身のできていない箇所が明確になり、色々助言をいただいたため」、「ぼんやりとしていた授業の課題が明確になったから」、「興味のあったID手法の具体的な適用方法を学べたため」などの回答がありました。

関連性についても、1名の受講者が4と回答しましたが、それ以外の受講者は6や7と回答し、その理由に関して、「自身が科目を持っていないため、想像で行う部分もあったが、既存の科目（講義）の改善案を検討できたため」、「他の受講生とディスカッションができ、自分の講義・演習内容にも活用できそうであるため」、「自らのシラバスを多角的な視点で見直すことができた。とても難しいとは思ったが、ぜひ来年度からできるところから早速試してみたいと思います」、「課題が分かるだけでなく、テストや課題の取り組みを通じて、改善案まで作れたから」などの回答がありました。

満足感について、全ての受講者が6や7と回答し、その理由に関して、「現在の講義演習内容の改善点が理解できたので良かった」、「公開講座とはまた異なる視点で授業を考えることができたため」、「シラバスはとりあえずやっていることを言葉に落として書くことが多かったが、教員視点だけではなく、どのように設計すると学生がやる気になるのか学生視点を想像して書く重要性や学びの羅針盤であることを再認識した」などの回答がありました。

自信については、4名の受講者が4、3名の受講者が3、6名の受講者が6と回答し、他の項目よりやや低い数値を示しました。「これまでの学びをシラバスにうまく落とし込むことができたかどうか、実践で試し、うまくいくように工夫を重ねていきたい」、「これまでの学びをシラバスにうまく落とし込むことができたかどうか、実践で試し、うまくいくように工夫を重ねていきたい」などの肯定的な回答が見られた一方で、「学んだことを実践できるか、現時点では自信がない」、「自分の理解が乏しい項目があるため自信を持つまでには至っていない」などの回答も見られました。今後は、モジュール2～4の学習において、受講者間のやり取りを通じた課題改善を余裕をもって行うなど、受講者が効率的かつ効果的にタスクを遂行できるよう、Moodleでの自主学習の形態を改善することで、受講者の自信を高める工夫につなげられると考えます。

2) 各モジュールでの説明、クイズ等で何か改善してほしい点があれば教えてください。

「レビューに説明がない部分を間違えている時、自分の回答が間違えていることはわかっていても、なぜ間違いなのかを理解することが難しく感じました」、「力試しテスト問題と練習問題との難易度が違っていたので、練習問題で力試しテストに近い問題も出してほしい」モジュール2の力試しテストに関する意見が多く見られました。2025年2月に修正作業は完了していますが、再度、テスト問題やコンテンツ間の乖離がないか、受講者の受験履歴等を分析したうえで、改めて修正に取り掛かる予定です。

3) 学習を促すメールとして各キックオフミーティングや対面学習の前に学習を促すメールを配信しました。これらはあなたの学習進捗にとって役に立ちましたか？

回答者全員が「役に立った」と回答し、その理由として、「特にモジュール2以降は、しばらく時間が空くためリマインドメールは学習を計画的に進める上で役に立ちました」、「実際には取り組む時間をうまく捻出できなかったのですが、メールをいただくことで取り組まねばならないという気持ちになり、意識することができました」、「期日や、やるべきこと、アドバイスを明記して下さっている点は非常に助かりました」などの回答を得ました。

4) 修了証明書（電子版）は今後、どのような目的で利用しますか？

2名中、1名の回答者が「将来、就職先等に提示することで自身の学びをアピールする」目的で利用すると回答し、1名の回答者が「自身の学びを振り返るために利用する」目的で修了証明書（電子版）を利用すると回答しました。

5) ポートフォリオの利用目的を教えてください。

2名中、1名の回答者が「将来、就職先等に提示することで自身の学びをアピールする」目的でポートフォリオを利用すると回答し、1名は「自身の学びを振り返るために利用する」と回答しました。

6) 本プログラムの学習で身についたと感じた知識・スキルと感じたものがあれば教えてください。

本プログラムの学習を通し、受講者がどのような知識・スキルが身についたと感じているのか、その一部を紹介します。

- 講義実施前に何度でも受けられる小テストをサイト上に掲載したい。
- 科目全般を通して、取り上げた科目改善に役に立つ内容を学習できた。

6ヶ月後追跡調査の結果（有料版）

2024年度の教育改善スキル修得オンラインプログラム 科目デザイン編（第10期・第11期）の修了者を対象に、2025年12月に実施した6か月後追跡調査（修了者5名のうち2名〔バッジ取得者のうち67%〕）では、オンラインプログラムで学習したモジュール1（大学教育に関する5つの物語）、モジュール2（認知的発達を促す授業方法）、モジュール3（評価と単位認定の見直し）、モジュール4（学習目標の高度化）の内容について、どの程度覚えているか（記憶度）および受講後の業務にどの程度役立っているか（有益度）について回答を求めました。

有益度については、多くの受講者がモジュール1～4の項目で「役立っている」「少し役立っている」と回答し、「覚えていない」「役に立っていない」と回答が過半数を超えた項目はありませんでした。一方、記憶度については、モジュール4において「覚えていない」が過半数を超えましたが、それ以外の項目では「よく覚えている」「少し覚えている」と回答した受講者がほとんどでした。

オンラインプログラムで学んだことをもとに、自分が従事する教育事例の改善に取り組んだかの設問については、すべての受講者が「はい」と回答し、アクションプランの実行状況とIDを活用した教育改善への取組状況、そして、具体的にどのような取り組みをされて、どのような成果を収めたのか、その事例を紹介します。

表：6ヶ月追跡調査によって報告された取り組み事例とその成果

改善内容	改善結果
・ある講義では、予習テストを実施し、講義日は教員の発言を10分程度とし、グループワーク（個人→グループ→個人）とグループでの発表を実施。また中間試験を3回ほど実施し、何度でも受験可能とした。	学生から、講義があつという間に感じると言われることがよくあり、教員ではなく学生が忙しい講義を作れるようになった。
学習者は学力レベルも日本語レベルも様々なので、事前課題を課したり、授業ごとにこまめにテストを実施し、繰り返し学べるようにした。	LMSを利用したテストでは、携帯で解答できるので、ChatGPTにまるまる送信して回答している学生がいた。期末テストでは携帯持ち込みができないので、点数が取れないと思うのだが、対策が必要になり、うんざりしている。
各回の授業にチェックリストを導入した。「しゃべるのは一割」「大事なことは3回はやる」「一人でできることは授業ではやらない」も取り入れた。また、科目ごとに事前テストを導入し、履修に当たって必要となる前提条件を受講生と共有した。	私の視点からではありますが、チェックリストの導入は科目の到達目標と各授業回の到達目標のつながりを意識した授業展開ができるようになったと思います。「しゃべるのは一割」は教育効果は感じます(たとえば統計スキルは成果物を見る限り上がったように思える)。しかし、不評であるようにも感じます(明確に授業アンケート等にかかれたわけではない)。「受動的に教わりたい」「正直つまらなくてもいいから、ただ授業時間が過ぎるのを待ったほうが好ましい」というような空気をひしひしと感じまし

	た。一割程度の学生は「能動的に学ぶことが楽しかった」とアンケート等で書いてきましたが、大多数にとっては教えて「もらう」度合いが低かったと感じているように思います。
--	---

表：6ヶ月追跡調査によって報告された周り（同僚、上司、組織全体等）の反応について

1	同じように講義づくりに悩んでいる同僚がおり、私がどんな手法を使っているか聞かれたので、自分が受けた研修について話した。
2	授業参観に来た同僚教員が、システムティックに作りこまれていると評し、授業改善プログラムに賛同を得られた。大学全体でもFDの内容に授業改善のスキルアップが多数取り入れられるようになった。
3	現任校の授業環境規範からは逸脱していることを感じています。愚痴ですが、「教科書に書いてあることをわかりやすく、スライドで教える」「知識を文字通り暗記することを求める」というタイプの授業が大多数であるなか、自分で考えてアウトプットする機会を中心とする授業は学生にとっても周囲の教員にとっても異質に感じられていると思います。周囲から悪く評価されているとは思いますが、異物的にみられているようには思います。

講座での学びをもとに授業改善に取り組んだことで、成果や周りの反応において良い結果を得られている事例が確認されました。一方で、改善に取り組む中で新たな課題に直面したり、周囲が依然として受動的な教育を行っている環境の中で、自分だけが能動的な授業に取り組むことで異質に感じられる場合もあるとの意見がありました。しかしこれは、本プログラムで効率かつ効果的な授業法を学んだ結果、従来の教育手法から脱却し、効率的かつ効果的な授業実践の一步を踏み出したことの表れであると考えられます。

「授業改善サポーター養成講座」での取り組み

文部科学省「職業実践専門課程等を通じた専修学校の質保証・向上の推進事業」の一環として、一般社団法人全国専門学校教育研究会が主催する「授業改善サポーター養成講座」への協力要請を受け、令和5年度より科目デザイン編のコンテンツを活用した講座を実施しました。2025年度は14名が参加し、以下の概要および日程で実施しました。

目標	・ 授業改善サポーターとして、各種ツールを活用して授業改善のための他者へのコンサルテーションを行うことができる。 ・ 自校における授業コンサルテーションの普及を目指した施策を、個人レベル、組織レベルで提案することができる。 ・ 授業改善サポーターとして相談し支援し合えるコミュニティを形成する。
対面学習 日程	【オリエンテーション】09月25日（木）15：30～16：30（オンライン）
	【第1回】10月07日（火）15：00-18：00（東京にて対面実施）
	【第2回】11月04日（火）14：00-17：00（オンライン）
	【第3回】12月01日（火）14：00-17：00（オンライン）
参加対象	インストラクショナルデザインの基礎知識をもち、授業改善サポーターとして、他者に対してコンサルテーションを行い、自校での教育改善に寄与しようとする教職員（昨年度受講履歴のある者も受講可）
定員	14名

オリエンテーションでは、科目デザイン編コンテンツの概要および学習方法について説明を行い、各回の対面学習までにコンテンツの学習と、授業改善活動分析レポートおよび授業シラバス案の提出を事前課題として求めました。

対面学習では、事前課題をもとに、コンテンツで学んだ授業方法・評価方法・学習目標を、自身の授業改善や授業サポートにどのように活用できるかについてグループで議論しました。

対面学習後には、アクションプランを事後課題として提出させ、次回の対面学習までの行動計画を作成させました。第2回および第3回の対面学習では、計画どおりに実行できたか、どのような成果が得られたか、また生じた課題への解決策について議論を行いました。

<受講後アンケート調査結果概要（2025年12月実施分）>

講座終了後、「授業改善サポーター養成講座【科目デザイン編】」の研修直後アンケートを実施しました（受講者14名中5名、回答率37%）。アンケートでは、以下の1）～2）の設問について回答を求めました。

1）科目デザイン編コンテンツの印象について

コンテンツ内容について、注意、関連性、自信、満足度の度合いについて7段階で回答を求めました。注意については、受講者1名が4、受講者1名が6、受講者3名が7と回答しました。関連性と満足感については、受講者全員が5～7を選択し、否定的な回答を行った受講者はいませんでした。

一方で、自信については、受講者1名が2、1名が4、1名が5、2名が7と回答し、他の項目に比べてやや低い数値を示しました。各設問の回答理由は次の通りです。

A：注意	・モジュールの問題が面白かった。 ・LMSに慣れるという事も大事。 ・自身の具体的な目標設定が出来ていなかった為。 ・段階的に学べる仕様になっていた。 ・多くの授業の実施アイデアがあり、私自身の授業改善につながった。
R：関連性	・モジュールの問題が面白かった。 ・具体化することができた。 ・内容自体は改善のためのとっかかりになると感じた。 ・内容が難しかったため。 ・他の職員の授業での悩みを聞くきっかけが作れました。また自分の授業についても自身が持てるようになりました。
C：自信	・知らない知識を得られたため。 ・教員への教育に何年かかるのか？途方に暮れていたが、突破口を見いだせた！ ・学科長として現状部下の指導に時間を取れていないと感じている。 ・全ての内容を研修内で理解できなかった。 ・授業改善の方向性が見えてきたため、授業を作る際に自信をもって作業に取り組みました。
S：満足感	・知らない知識を得られたため。 ・まだまだ未熟です。ぜひご指導願います！ ・再度となりますが、内容自体は興味をそられるものだった。 ・今後の授業改善で役立てたい ・これまで手探りで授業づくりをしていたところ、多くのアイデアの中から、ある程度適切だと思われるものを選んで授業設計が出来ているため、学んで良かったと感じます。また他の職員の悩みについても、アドバイスできるようになり、自信にもつながりました。

2) 特に有益だった・役に立った学習内容について

- ・モジュールAの7つのアイデア。改めて、授業作成時に意識できると思った。
- ・全て。
- ・モジュールAの授業の実施方法とその前提となる説明や意識づけの部分について知ることが出来た。
- ・動画・文章・テストで説明・理解できるシステムは良かった。自分で勉強できる人なら十分だと感じた。
- ・問題が充実しているため、解いている間に勘違いしている部分に気づくことができました。問題が充実しているのはありがたいです。

3) 身についたと感じた知識・スキルについて

- ・モジュールAの7つのアイデア。特に、大事なことは3回は改めて理解。しゃべるのは1割を達成するための準備を始めたいと思いました。
- ・一般的な教育論を学ぶ機会が無かったため、全般的に新鮮な知識でした。IDなどの学生が学習に自ら望む前提作りや授業運営・評価方法など知識として学ぶ事が出来ました。
- ・授業評価表の作成方法
- ・やはり、授業改善の方法について知れたことです。実際のカリキュラムや授業に落とし込むには時間がかかるため、なかなか難しい部分もありますが、一気に進めずに少しずつ、目標の高度化から始めたいと思います。IDについて知識や考え方はあれど、具体的な部分が不明だった為、今回の授業改善のアイデアが知れたことはとても大きいと思います。

「自律学習支援編」本年度の取り組み概要

履修証明制度による講座として提供を開始した「科目デザイン編」の続編として、2020年度に「自律学習支援編」の無料版を公開し、2021年度より有料版の運用を開始しました。本講座では、大学生の自律的な学びを支援するため、授業に盛り込めるさまざまなICT活用のヒントを提供するとともに、『学習設計マニュアル』を教員の立場から読み進めるというコンセプトで整備を進めてきました。本年度は有料版第5期を募集し、2名が修了しました。

教育改善スキル修得オンラインプログラム（自律学習支援編）

<https://kyoten1.cica.jp/moodle2/>

日本語 (ja) ログイン

教育改善スキル修得オンラインプログラム（自律学習支援編）

ホーム画面

初めてアクセスされた方へ

本教材へようこそ。まず、右のボタンをクリックして、このプログラムの学習の進め方を一緒に確認しましょう。

[学習の進め方](#)

ナビゲーション

- [ホーム画面へ戻る](#)
- [進捗管理画面へ戻る](#)
- 学習状況証明書を発行（無料ユーザー向け）
証明書はいつでも発行可能
- 学習状況証明書を発行（有料ユーザー向け）
有料ユーザーのみアクセス可能です。

関連サイト

本プログラムは、熊本大学教授システム学研究センターが運営しています。

RCIS 教授システム学研究センター
Research Center for Instructional Systems

熊本大学大学院 国際文化科学研究科 教授システム学専攻

モジュール1：学生が自分の学びと向き合うきっかけをつくる

モジュール1では、学生の自律学習を支援するための第一歩として、学生に自分の学びと向き合うきっかけをつくるための7つの提案をします。「大学での学び方」を教えるために、「自分の科目で何ができそうか」を考えてみましょう。

[アクセスする](#)
要ログイン

*旧モジュール1「大学教育に関する5つの物語」はこちら

モジュール2：自学自習を促すICT活用

モジュール2では、学習者に自学自習を促すためにICTで何ができるのか、その手段を学び、実際にICTを導入した授業設計ができるように学びます。

[アクセスする](#)
要ログイン

モジュール3：学生が学び合う場をつくる

モジュール3では学習者に学びの場を提供するアイデアを学び、それを取り入れた授業設計ができるように学習します。

[アクセスする](#)
要ログイン

モジュール4：学生を自己調整学習者に育てる

モジュール4では、学習スキルのノウハウを学び、学習者に対し、そのスキルを学ばせる機会を授業内でどのように提供していくのか設計できるように学びます。

[アクセスする](#)
要ログイン

ご意見はこちら

図：教育改善スキル修得オンラインプログラム（自律学習支援編）トップ画面

プログラムの学習内容（有料版と無料版）

科目デザイン編同様、無料版の学習者は各モジュールで知識を学習、自身が学習したことを身につけることができたのかを確認するクイズを受験することができます。

一方、有料版学習者に対しては、無料版の範囲に加え、自身の担当科目の修正案に関する他の学習者とのディスカッション、教員による添削が受けられる課題提出まで提供されます。また、有料版学習者に対しては2回の対面学習が開催され、各対面学習では学習者がモジュールを学習しているときに感じた疑問点を共有、議論する機会を設けています。

各モジュールで学習しながら自身の担当科目を修正することで、本プログラムの修了後、すぐに改善した状態の自身の科目を実施できるようにしています。

表：各モジュールの対象者及び内容

モジュール名	対象者	内容
オリエンテーション	有料版	各モジュールの学習を始める前に、学習環境の準備や自己紹介をしましょう。
モジュール1 学生が自分の学びと向き合うきっかけをつくる	無料版 有料版	学生の自律学習を支援するための第一歩として、学生に自分の学びと向き合うきっかけをつくるための7つの提案をします。「大学での学び方」を教えるために、「自分の科目で何ができるそうか」を考えてみます。
モジュール2 自学自習を促すICT活用	無料版 有料版	学習者に自学自習を促すためにICTで何ができるのか、その手段を学び、実際にICTを導入した授業設計ができるように学びます。
モジュール3 学びの場を作る（学びの場の提供）	無料版 有料版	学習者に学びの場を提供するアイデアを学び、それを取り入れた授業設計ができるように学習します。
モジュール4 学生を自己調整学習者に育てる	無料版 有料版	学習スキルのノウハウを学び、学習者に対し、そのスキルを学ばせる機会を授業内でどのように提供していくのか設計できるように学びます。
モジュール5 最終課題	有料版	モジュール1からモジュール4で学習したことを振り返り、自身の科目を修正します。

アクセス数

2025年3月から2026年2月までのサイトへの訪問者数と、無料版プログラムを修了しデジタルバッジを取得した学習者の数を、以下に提示しています。
訪問者数については現在集計中です。前提科目である科目デザイン編の更なる受講者獲得を進めることで、後続科目である自律学習支援編の受講者を増やすことが可能となります。それに合わせて、講座を知ったきっかけやサイトのアクセス状況を詳細に分析したうえで、広報活動を行い、無料版・有料版の受講者の獲得に努めていきます。

モジュール名	訪問者数（IPアドレス）				無料版プログラム： デジタルバッジ取得者数			
	2022	2023	2024	2025	2022	2023	2024	2025
モジュール1：学生が自分の学びと向き合うきっかけをつくる	37	32	12	6	3名	2名	1名	2名
モジュール2：自学自習を促すICT活用	18	15	16	16	3名	2名	1名	2名
モジュール3：学びの場を作る（学びの場の提供）	15	8	6	6	3名	2名	1名	2名
モジュール4：学生を自己調整学習者に育てる	13	9	5	6	3名	2名	1名	2名

受講後アンケート調査の結果

教育改善スキル修得オンラインプログラム 自律学習支援編（第5期）の受講直後アンケート（修了者2名のうち2名（バッジ取得者のうち100%））では、以下、1）～4）の設問に対する回答を求めました。

1）各モジュールの学習内容について、何か改善してほしい点があれば教えてください。

改善点については「特になし」との回答を得ました。

2）学習を促すメールとして各キックオフミーティングや対面学習の前に学習を促すメールを配信しました。これらはあなたの学習の進捗に役に立ちましたか？

回答者2名はいずれも「役に立った」と回答しました。その理由として、「タイムリミットがある中で、事前にリマインドの連絡をもらえたことが良かった」「スケジュールを意識して行動することができた」との回答が得られました。

3）オンラインプログラムについて、どのような印象を持ちましたか？

オンラインプログラムの印象について、ARCSモデルの各要素ごとに、1～7の7段階評価で回答を求めました。

【A：注意】回答者2名はいずれも7段階評価で7および6を選択しました。その理由として、「教員がすべてを教えるのではなく、学生に自律的に学習に取り組んでもらうための働きかけについて学びたいと思ったから」、「授業改善に伴うさまざまなアイデアを学ぶことができたから」との回答が得られました。

【R：関連性】回答者2名はいずれも7段階評価で7および6を選択しました。その理由として、「シラバスを提示した授業にとどまらず、実習において、これまで学校で学んだことと実際の経験がどのように結びついているのかに気づけるような関わりができると思ったから」、「自身が改善を検討している講座を改善するための直接的なアイデアを学び、それを実際に組み込んでいく過程を体験できたから」との回答が得られました。

【C：自信】回答者2名はいずれも7段階評価で4を選択しました。その理由として、「どのように活用すれば学習効果が高まるのか、検討すべき点が多いから」、「力試しテストや課題提出を通して学んだアイデアをある程度身に付けることはできたが、まだ十分に運用できる自信がないため」との回答が得られました。

【S：満足感】回答者2名は、7段階評価でそれぞれ7および5を選択しました。その理由として、「今回の研修を通して多くの学びがあった。知識にとどめず、自身の授業や演習、実習指導にどのように活用できるかについて、目的や評価も踏まえて検討したいと思った」、「今後、授業の設計や改善を行う際のさまざまなアイデアを学ぶことができ、有意義であった」との回答が得られました。

以上の結果から、本オンラインプログラムは、受講者に対して高い動機づけ効果をもたらしていることが示唆されます。特に、ARCSモデルの「注意（A）」および「関連性（R）」において高い評価が得られたことから、内容が受講者の関心を喚起するとともに、自身の授業実践と結び付けて具体的に捉えられていたことがうかがえます。これは、理論の提示にとどまらず、実際の教育改善場面への応用を意識した設計が有効に機能している結果と考えられます。

一方で、「自信（C）」の評価は他の要素と比べてやや控えめであり、学習内容を十分に運用できるかどうかについては慎重な姿勢が見られました。このことは、受講者が学習内容を表面的に理解するだけでなく、実践への適用可能性を真摯に検討していることの表れとも解釈できます。今後は、実践事例の共有やフォローアップの機会を設けることで、自信の形成をさらに支援できる可能性があります。「満足感（S）」については高い評価が得られ、知識習得にとどまらず、自身の授業改善に活用しようとする前向きな意欲が示されました。これは、本プログラムが受講者の内発的動機づけを高め、継続的な教育改善への姿勢を促す設計となっていることを示しているといえます。

総じて、本プログラムは受講者の関心喚起と実践的関連性の確保において強みを有しており、今後は「自信」の側面を補強する支援体制を整備し、より一層効果的なFDプログラムへと発展させていきたいと考えています。

6ヶ月後追跡調査の結果（有料版）

教育改善スキル修得オンラインプログラム「自律学習支援編」（第4期）の修了者を対象に、修了6か月後の追跡調査を実施しました。修了者1名（バッジ取得者の100%）から回答を得て、プログラム内容の記憶度（どの程度覚えているか）および有益度（業務にどの程度役立っているか）について確認しました。その結果、モジュール1～5のほとんどの項目で、「覚えている」「少し覚えている」「役立っている」「少し役立っている」といった肯定的な回答が得られました。記憶度・有益度ともに、「覚えていない」「役立っていない」という否定的回答が過半数を超える項目はありませんでした。

＜6ヶ月後追跡調査結果概要（2025年12月（第4期）実施分＞

オンラインプログラムで学んだ内容をもとに、自身が従事する教育事例の改善に取り組んだかを尋ねたところ、改善に取り組んだとの回答が得られました。

アクションプランの実行状況およびIDを活用した教育改善の具体的な内容としては、「グループワークが主な活動であるが、体育という科目の特性上、得意・不得意の差により他人任せになる学生がいる」という課題を挙げています。これに対し、改善策として、①主体性を高めるために学習プロセスを振り返る活動を2回実施し、自身の得意・不得意を自覚させたこと、②グループワーク実施前に事前課題に取り組みせ、個人としての準備を促すことで他人任せにならないよう工夫したことが報告されました。

成果については、「まだ実施途中ではあるが、学生は他人任せになっていない様子である」との回答が得られています。また、別の会議において学生の振り返り活動が議題となった際、教育学部全体として学習プロセスを振り返る機会の必要性を提案したものの、十分な理解は得られなかったとのこと。そのため、「自身の担当科目においては継続して取り組む予定である」との回答が示されました。

以上の結果から、オンラインプログラムでの学びが具体的な教育実践へと転移していることが確認できました。特に、学習者の主体性という抽象的な課題に対し、学習プロセスの振り返り活動や事前課題の設定といった具体的な方策へと落とし込み、授業改善に取り組んでいる点は、IDの視点を活用した実践的な改善事例といえます。

また、成果がまだ検証段階にあるものの、学生の行動変容の兆しが見られていることは、改善の方向性が適切である可能性を示唆しています。一方で、学部全体への展開については十分な理解が得られなかったことから、個人の実践を組織的改善へと広げていく難しさも明らかになりました。

今後は、個々の授業改善の成果を可視化・共有する仕組みを整備し、個人の実践を組織的なFD活動へと発展させていきたいと考えています。

共同利用拠点事業⑥

FD活動デザイン編

本センターでは2021年から、
FD活動の設計について学習するオンラインプログラム
「教育改善スキル修得オンラインプログラム-FD活動デザイン編-」
を開発・公開しています。

本年度の取り組みの概要

人文・社会 / 教育工学

【熊本大学】効果的なFD研修の設計について学んでみませんか

高等教育機関のFD研修を効果的に改善したい方、初めてFD研修を担当する方、FD研修をどのように実施していいの悩んでいる方、

高等教育を変えるFD研修の設計方法について学んでみませんか。

熊本大学ではオンラインで学べる履修証明プログラム「FD活動デザイン編」有料版第4期の受講生を募集しています。

形だけのFD研修をやめて高等教育機関の教育改革に直結したFD研修を実現させませんか。FD研修（またはブレFD）に携わる皆様のご応募を心よりお待ちしております。

◆対象者：高等教育機関でFDを担当、もしくは担当を予定している高等教育機関の教職員

◆定員：10名（2025年度）

◆受講料：60,000円（履修証明書の発行手数料を含む）

◆学習期間

2025年7月7日（月）～11月10日（月）までの任意の60時間

＊2025年7月26日（土）と2025年10月11日（土）に対面／同期型研修があります。

＊上記の対面／同期型研修は現地参加（東京）とオンライン参加が選択できます。

図：FD活動デザイン編受講者募集を告知するresearchmapでのプレスリリース

履修証明プログラム第3弾として、2022年にFD担当教職員向けの新たな講座「FD活動デザイン編」の無料版を公開し、有料版の運用を開始しました。本プログラムは、2020年度末に発出した「オンライン教育の新たなモデルの構築に向けた提言」および「FD活動の客観的な成果分析の枠組みについての提言」を踏まえ、コロナ禍後を見据えたオンライン教育を定着・発展させることができる教職員の育成を目的としています。

本年度は有料版の実施には至りませんでした。コンテンツの充実を図るため、テスト内容および教材コンテンツの見直し・修正を行いました。

教育改善スキル修得オンラインプログラム（FD活動デザイン編）

<https://kyoten1.cica.jp/moodle3/>

教育改善スキル修得オンラインプログラム（FD活動デザイン編）

ホーム画面

初めてアクセスされた方へ

本教材へようこそ。まず、右のボタンをクリックして、このプログラムの学習の進め方を一緒に確認しましょう。

[学習の進め方](#)

モジュール1：FDはこのままでよいのか（大学のワンランクアップに向けて）

モジュール1では、「問題提起：IDはFDの基礎になるか？」や「FDの義務化はどのように始まり何をもたらしたか」といった観点から、FDに関する5つの物語を学習します。

[アクセスする](#)

アカウントなしで閲覧可能

モジュール2：FD活動のKPI（評価指標）：FD活動をアピールするための7つの提案

FD活動のKPI（評価指標）として、どのようなデータを収集・評価すべきかについて学習します。

[アクセスする](#)

*要ログイン

モジュール3：FD研修のバージョンアップ：年1回の講演会を超えるための7つの提案

年1回、イベント型で行うFD研修ではなく、「事前資料付講演（反転授業型）」や「事前課題＋アクションプラン作成」といったFD研修の7つのアイデアについて学習します。

[アクセスする](#)

*要ログイン

モジュール4：ラーニングコモンズの活動を設計する：授業以外の学習支援の7つの提案

モジュール4では授業以外の学習支援として、「チューター研修と認証」や「参考文献よりもジョブエイド」といった7つのアイデアについて学習します。

[アクセスする](#)

*要ログイン

図：FD活動デザイン編のトップ画面

プログラムの学習内容（有料版と無料版）

無料版の学習者は各モジュールで知識を学習、自身が学習したことを身につけることができましたのかを確認するクイズを受験することができます。

一方、有料版学習者に対しては、無料版の範囲に加え、自身の担当研修の修正案に関する他の学習者とのディスカッション、教員による添削が受けられる課題提出まで提供されます。また、有料版学習者に対しては2回の対面学習が開催され、各対面学習では学習者がモジュールを学習しているときに感じた疑問点を共有、議論する機会を設けています。

各モジュールで学習しながら自身の担当研修を修正することで、本プログラムの修了後、すぐに改善した状態の自身の研修を実施できるようにしています。

表：各モジュールの対象者及び内容

モジュール名	対象者	内容
オリエンテーションモジュール	有料版	各モジュールの学習を始める前に、学習環境の準備や自己紹介をしましょう。
モジュール1：FDはこのままでよいのか（大学のワンランクアップに向けて）	無料版 有料版	「問題提起：IDはFDの基礎になるか？」や「FDの義務化はどのように始まり何をもたらしたか」といった観点から、FDに関する5つの物語を学習します。
モジュール2：FD活動のKPI（評価指標）：FD活動をアピールするための7つの提案	無料版 有料版	FD活動のKPI（評価指標）として、どのようなデータを収集・評価すべきかについて学習します。
モジュール3：FD研修のバージョンアップ：年1回の講演会を超えるための7つの提案	無料版 有料版	年1回、イベント型で行うFD研修ではなく、「事前資料付講演（反転授業型）」や「事前課題＋アクションプラン作成」といったFD研修の7つのアイデアについて学習します。
モジュール4：ラーニングコモンの活動を設計する：授業以外の学習支援の7つの提案	無料版 有料版	モジュール4では授業以外の学習支援として、「チューター研修と認証」や「参考文献よりもジョブエイド」といった7つのアイデアについて学習します。
モジュール5：最終課題	有料版	モジュール1からモジュール4で学習したことを振り返り、現状をワンランクアップするためのアクションプランを作成します。

アクセス数

2025年3月から2026年2月までのサイトへの訪問者数と、無料版プログラムを修了しデジタルバッジを取得した学習者の数を、以下に提示しています。
訪問者数については現在集計中です。今後、サイトのアクセス状況を詳細に分析したうえで、広報活動を行い、無料版・有料版の受講者の獲得に努めていきます。

モジュール名	訪問者数（IPアドレス）				無料版プログラム： デジタルバッジ取得者数			
	2022	2023	2024	2025	2022	2023	2024	2025
モジュール1：FDはこのままでよいのか（大学のワンランクアップに向けて）	188	100	12	7	23名	1名	2名	1名
モジュール2：FD活動のKPI（評価指標）：FD活動をアピールするための7つの提案	39	11	7	5	14名	1名	2名	0名
モジュール3：FD研修のバージョンアップ：年1回の講演会を超えるための7つの提案	38	13	5	5	19名	2名	2名	0名
モジュール4：ラーニングコモンズの活動を設計する：授業以外の学習支援の7つの提案	37	13	10	6	18名	1名	2名	0名

6ヶ月後追跡アンケート調査の結果

教育改善スキル修得オンラインプログラム「FD活動デザイン編」（第3期）の修了者を対象に、修了6か月後の追跡調査を実施しました。修了者2名のうち1名（バッジ取得者の50%）から回答を得て、オンラインプログラムの内容をどの程度覚えているか（記憶度）、および受講後の業務にどの程度役立っているか（有益度）について確認しました。その結果、モジュール1～5の各項目について、「よく覚えている」、「少し覚えている」、「役立っている」、「少し役立っている」との回答が得られ、記憶度・有益度ともに「覚えていない」「役立っていない」という否定的な回答はありませんでした。

＜6ヶ月後追跡調査結果概要（2025年12月（第3期）実施分＞

オンラインプログラムで学んだ内容をもとに、自身が従事する研修事例の改善に取り組んだかについて確認したところ、「実行した」との回答が得られました。具体的な取り組みとしては、「FD実施後アンケートの結果を踏まえ、次年度のFD内容を検討した」とのことでした。成果については、「実施前に異動となったため手ごたえは得られなかった」との回答があり、異動により改善の成果を見届けることはできなかったようです。しかし、改善に取り組んだ結果として、「研修での取り組みを課内で共有した」「上司からの評価につながった」との回答が得られました。

以上の結果から、オンラインプログラムでの学びが実際の業務改善行動へと結び付いていることが確認できました。たとえ異動により直接的な成果を見届けることができなかった場合でも、アンケート結果を基に次年度計画を検討するなど、学習内容を実務に応用しようとする姿勢が見られました。また、取り組みの内容が課内で共有され、上司からの評価につながった点は、個人の実践が組織内へ波及する可能性を示すものといえます。

このことから、本プログラムは単なる知識の習得にとどまらず、FD活動の改善に向けた実践的な行動変容を促す効果を有していると考えられます。

共同利用拠点事業⑦ ラーニングテクノロジー ワークショップ

本センターでは2021年から、
ラーニングテクノロジーについて学習するワークショップを
実施しています。

本年度の取り組みの概要

本取り組みでは、教育のオンライン実施がコモディティ化したことを土台として、従前の教育形態では実現できなかった教育やFDを実現するためのラーニングテクノロジー（人工知能技術やラーニングアナリティクス等）活用方法を実習形式で学ぶことのできるワークショップを大学教員向けに実施しました。

本年度は、2024年度より開始された公開講座を、「AI実践アイデアワークショップ編」と「AIツール開発ハッカソン編」と名称を変更し、2種類に分けて実施することで、広くかつ継続的に教育を提供できる仕組みの構築を目指しました。

本年度開始した公開講座の概要は以下の通りです。

講座名	概要
どうやって使う？ AI実践アイデアワークショップ編	普段コーディングを行わない方でも、生成AI活用のための知識・スキルを学び、生成AI利用を考えるアイデアワークショップは受講して学んでいただくことができます。
アイデアを形に！ AIツール開発ハッカソン編	普段コーディングを行う方（またはAIを利用したコーディングに興味のある方）は、生成AI導入を目的としたAIツールを作成する「AIツール開発ハッカソン編」を受講いただけます。



図：「どうやって使う？AI実践アイデアワークショップ編／アイデアを形に！AIツール開発ハッカソン編」ウェブサイト
(<https://www.gsis.kumamoto-u.ac.jp/koukaikouza/ai.html>)

2025年度：ワークショップ一覧

以下のワークショップを開催しました。Zoomによるオンライン開催にて、全国から多くの教員・職員等が参加しました。

表：2025年度ワークショップ一覧

日時	タイトル	当日の流れ	参加人数
2025年7月29日 (火) 2025年10月13日 (月・祝)	GSIS公開講座 どうやって使う？ AI 実践アイデアワーク ショップ編	開催方法： Zoom 主催：熊本大学 大学院 教授システム学専攻／教授システム学教育実践力開発拠点 タイムテーブル： 事前準備・事前学習(eラーニング) 10:30-10:45 オープニング 10:45-12:10 AIの様々な応用事例 • 音声でのAIとの会話: 作業中にAIが音声でサポートする • 文章からの画像生成: テキストによる指示で生成 • Excelの計算式の生成: 目的を伝えるだけで計算式を生成 • メモ書きの文章化: 簡単なメモ書きを体裁の整った文章に • 音声ファイルの文字起こし • 小テスト問題の自動生成: 4 択問題や穴埋め問題など • プレゼン資料生成 (Gammaなど) : 既存の文章を基づいてスライドを生成 • 動画生成 (Hailuoなど) : テキストから動画を生成 • アップロードした文書に基づいてAIに答えさせる (Notebook LM) • プログラム作成 (Gemini Canvasなど) : 対話によって生成してその場で実行・共有 12:10-13:00 休憩 13:00-14:00 グループ内での自己紹介とアイデア出し 14:00-14:10 休憩 14:10-15:30 アイデアの絞り込みとプレゼンテーション準備 15:30-16:30 各グループからのプレゼンテーションと講評 16:30-17:00 投票と結果発表／クロージング	7月29日 9名 10月13日 20名 合計：29名

2025年9月9日 (火) 2025年11月2日 (日)	GSIS公開講座 アイデアを形に！ AI ツール開発ハッカソ ン編	開催方法： Zoom 主催：熊本大学 大学院 教授システム学専攻／教授システム学教育実践力開発拠点 タイムテーブル： 事前準備・事前学習(eラーニング) 10:30-10:45 オープニング お題（テーマ）の説明 10:45-12:10 Streamlit (Python) でのアプリ開発と公開の方法（実演と質疑応答） • Streamlit Community Cloud の利用方法 • 生成AI を用いた Streamlit コードの生成 • Streamlit で Gemini API を呼び出す • （参考）ChatGPT API, Claude API での呼び出し 12:10-13:00 休憩 13:00-15:00 各自それぞれでアプリの開発と公開（講師への質問も） 15:00-15:30 プレゼンテーション準備 15:30-16:30 各自が開発したアプリのプレゼンテーション 16:30-17:00 投票と結果発表 クロージング	9月9日 3名 11月2日 13名 合計：16名
---------------------------------------	--	--	--

【公開講座AI編】 全受講人数：45名

各回共通：募集人数：48名 開講時間：10:30～17:00 時間数：5.5時間

No	講座名	開講日	会場名	受講人数
1	AI実践アイデアワークショップ編	7/29 (火)	Zoom	9名
2	AI実践アイデアワークショップ編	10/13 (月・祝)	Zoom	20名
3	AIツール開発ハッカソン編	9/9 (火)	Zoom	3名
4	AIツール開発ハッカソン編	11/2 (日)	Zoom	13名

参加者の声（レベル1）

事後アンケートを通し、講座へ参加された方からいただいたコメントの一部を、以下にご紹介します。（設問：講座の良かったと思う点）

<アイデアワークショップ編>

- ・生成AIの利活用について、研修に活かそうです。
- ・様々なAI活用方法を聞いた、具体的な活用方法を考えられた
- ・自分からはどこから手をつけて良いか分からないことを、講座の時間を利用して学ぶことができた。早速実務に役立てることができている。
- ・運営の先生や講師の先生に気軽に質問をできる雰囲気、安心して受講できました。
- ・これまで知らない生成AIのツールを知ることができただけでなく、講座を受講する環境がMoodleを活用した新しい教育実践の方法で、大変勉強になりました。
- ・グループワークがあった。様々なツールを利用できた。
- ・他の訓練生と交流が持てた。
- ・他の訓練生も同様のAIに関する悩みを持っていて、どのように対応しているか知れた。
- ・様々なAIツールについて学ぶことが出来た点。
- ・教えて頂いた後、実際にそれを使って練習できた点。グループの中で、自分の知らないツールやその活用の仕方を学べた点。
- ・AIツールを色々紹介してくださり、具体的な使い方を示していただいた。
- ・グループワークやプレゼンテーションで他の参加者のアイデアを知ることができた。
- ・いろいろなAIツールがあることがわかりました。いろいろなことができることがわかりました。
- ・グループワークでの話し合い、その後90秒で自分の考えを発表する場があった点。
- ・自分で考えることができた。別の方の発表で欠落したポイントに気づけた。
- ・Notebook_LMの紹介。Gemini Canvasの紹介
- ・Gammaなど、知らなかったAIを知る事ができた。同じ課題でも問題解決の方法が様々なAIの使い方があり、勉強になった。
- ・興味関心のある点に関して、具体的な講義が聞いたこと。また、その内容を使ってグループワークができたこと。
- ・グループワークによる他のメンバーによる使用方法を学べた。
- ・グループワークによる職場ごとの使用状況に関して知ることができた。
- ・実例を見れたこと。講座後のブレイクアウトルームで話せたこと。
- ・最初にどの応用例に興味があるかを質問してその結果に沿って始められた点、グループワークでアイデアを出し合った点。
- ・生成AIには様々なプラットフォームがあり、利用目的を明確にし、それぞれの特色を確認した上で選択することを知った。
- ・喜多先生の課題で設定したデータ量の解説を聞いて、ある程度のデータ量であれば、gemini等の各種サービスを使って処理できるが、件数が万を超えるような大容量の場合はクラウドプラットフォームの各種サービスを利用するという至極基本的なことに気付かされた。
- ・Note book LMの紹介、AIのさまざまな応用事例の紹介。
- ・「応用事例の参考資料」AIツールの多様な応用事例が具体的に示された点が良かったです。
- ・「先生の実際操作」：先生によるAIツールの具体的な操作デモンストレーションが非常に参考になりました。
- ・無料でも、ある程度使用できるものがあるという知見を得られたこと。また、note book LMは、要約だけでなく、さまざまな機能があり活用の幅が広がりそうなことを知ることができたこと。

- ・質問する時間など双方向性があったこと。事前課題、講義、グループワーク、個人ワーク、発表、と網羅的な体験を通じて学べたこと。
- ・グループワークが少人数だったこと。ワークの時間がしっかり確保されていたこと。
- ・様々な事例の中には普段触れていない内容もあり参考になりました。グループワークで、自分とは異なる視点の方とディスカッションできてとても勉強になりました。
- ・様々な業種、職種の方とグループで討議できた。AIを使いこなすことも大切ではあるが、データの取り扱い、共有方法（効率の良い教授方法）も大切であることが確認できた。

上記の受講者の声を総合すると、アイデアワークショップ編では、生成AIツールの理解促進に加え、実践的に操作・応用を体験できる学習設計であったと考えられます。特に、グループワークや発表を通じて多様な視点や活用方法に触れられた点や、双方向性と安心感のある学習環境が、学習効果を高めた要因と考えられます。今後も、受講者が学んだ知識を実務や教育改善に積極的に応用できるよう、体験型・双方向型の学習設計を継続・強化していきます。

<ハッカソン編>

- ・アプリ開発を身近に感じる事ができた。機会がなければ触らなかったであろうサイトなどを活用できた。
- ・無料でアプリ開発できるツールを紹介して下さったこと。googleで簡単にアプリにアクセスできたこと。
- ・基礎から学ぶことができたこと。開発そのものに限らず、開発におけるAIの活用についても学ぶことができたこと。
- ・ツールを作成できた。難しいことに挑戦できた。
- ・streamlitで実際にアプリ開発ができた。未経験でもアプリを作ることができた。
- ・他者のアイデアを知ることができ、興味深かった。実際にチャットボットを作成できたこと。他の人のアイデアを聴けたこと。
- ・短い時間でも、AIを使いながらであれば機能開発できるということが分かり良かった。コードを書いたことがない方でも、短い時間で開発できることが分かり良かった。
- ・アプリがどのように開発されるか体験できた点、今はAIがアプリ作成のサポートをしてくれるという点を知ることができて良かったです。
- ・わかりやすく教えて下さった点。他の人のアイデアなどを聞くことができる点。公開講座の雰囲気がとても心地よい点。実践的な点。などたくさんありました。
- ・情報がmoodleにまとまっている。Streamlitツールを知れたこと。
- ・戸田先生とお話しして、学びを得られたこと。他業種の現場で抱えている課題を知れたこと。
- ・ChatGPTのAPI無料枠は使えないこと。コードが分からなくてもアプリ開発ができちゃうことを実体験として得られたこと。
- ・午前中に生成AIを用いたアプリの開発のデモを見ることができたこと。またびデモを見ながら自分自身で作成することができたこと。
- ・実際に開発ができること。他の人のアイディアが聞けること。
- ・Streamlitでデプロイできたこと。pythonのコードを見ることができたこと。テンプレートの選択と、課題の提示のレベル感がほど良かったと思います。
- ・全く知らなかったことが、知ることができた。夏からたくさん受講していたので、次第にPythonに慣れることができた。

上記の受講者の声から、ハッカソン編では、アプリ開発の敷居を下げるとともに、生成AIの利活用やツール操作を実体験を通して学べる構成が、受講者の満足度向上に寄与したのではな

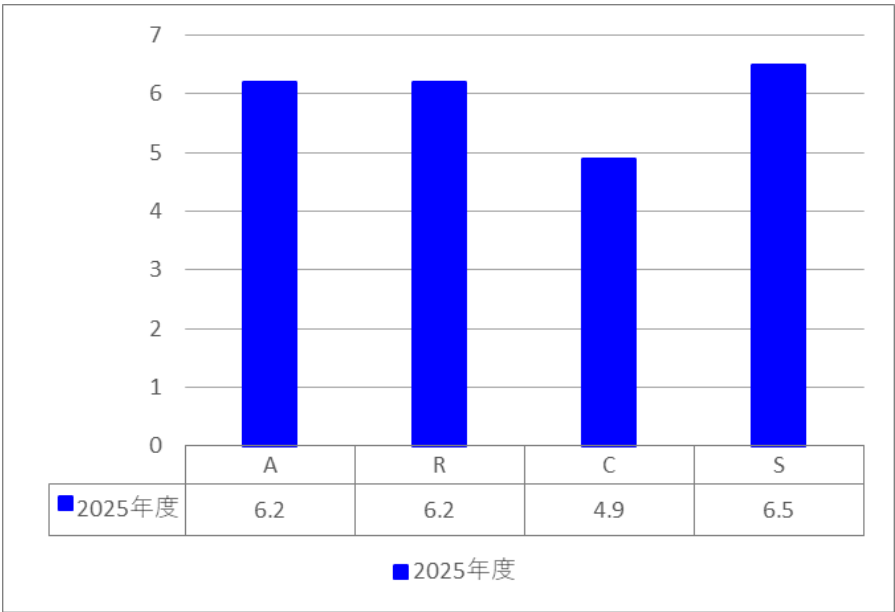
いかと考えます。特に、実践的な操作体験と他者との交流を通じた学びが、理解の定着や創造的活用意欲の向上に貢献しているようです。今後も、段階的かつ実践的な学習設計と、受講者間の交流機会を維持・強化していきます。

受講後アンケートの結果（レベル2：主観的評価）

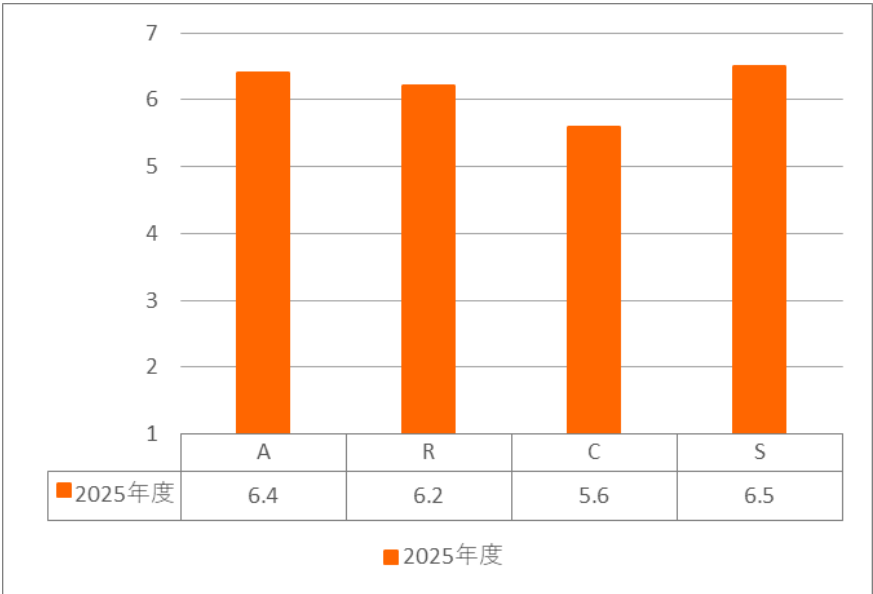
2024年度のAI・ラーニングテクノロジー編受講者に対する受講後アンケート（参加67名のうち47名（受講者のうち70%）では、講座に対する印象をARCSモデルに基づき測定し、講座で掲げた学習目標を達成できたかについても、入門編と応用編別に回答を求めました。

1）AI・ラーニングテクノロジー編についての印象

講座の印象について、ARCS別に7段階評価で測定し、全体回答の平均値がどのようなであったか、調査しました。
その結果、AI・ラーニングテクノロジー編では、c以外の値が5以上を示し、cに関しては、3.5以上の数値を示し、講座への評価が高めであることが確認できました。
以下の図で、講座への印象に関する回答結果を提示しました。



図：AI実践アイデアワークショップ編への印象に関するARCS平均値の推移（2025年度）



図：AIツール開発ハッカソン編への印象に関するARCS平均値の推移（2025年度）

2) AI・ラーニングテクノロジー編での学習目標達成状況について

学習目標：アイデアワーク編

1. LLM（大規模言語モデル）などを利用したAIツールがどのような処理を行うことができるのか、具体例を挙げて説明することができる。
2. 実務的な問題の解決のために、AIツールを活用するアイデアを出すことができる

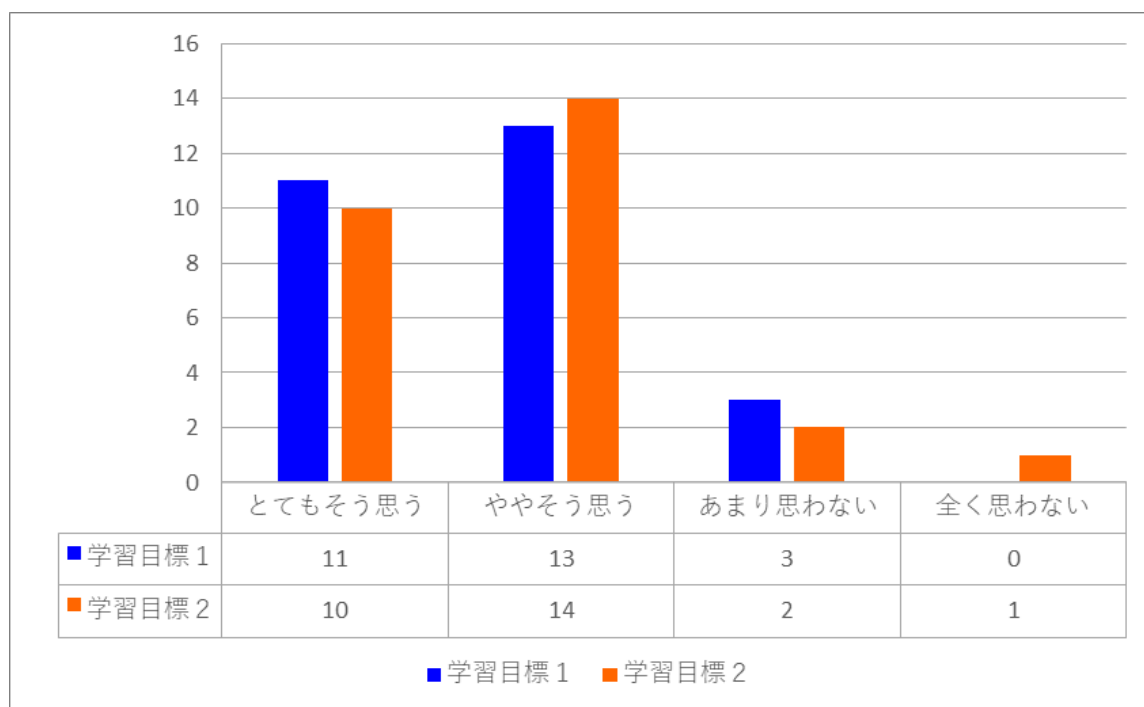
学習目標：ハッカソン編

1. PythonでWebアプリを作成できるフレームワーク Streamlit を使い、LLMベースのAIを利用したアプリを作成し公開することができる。
2. 自身のアイデアに基づいて生成AIを活用して効率的に Streamlit アプリを作成することができる。

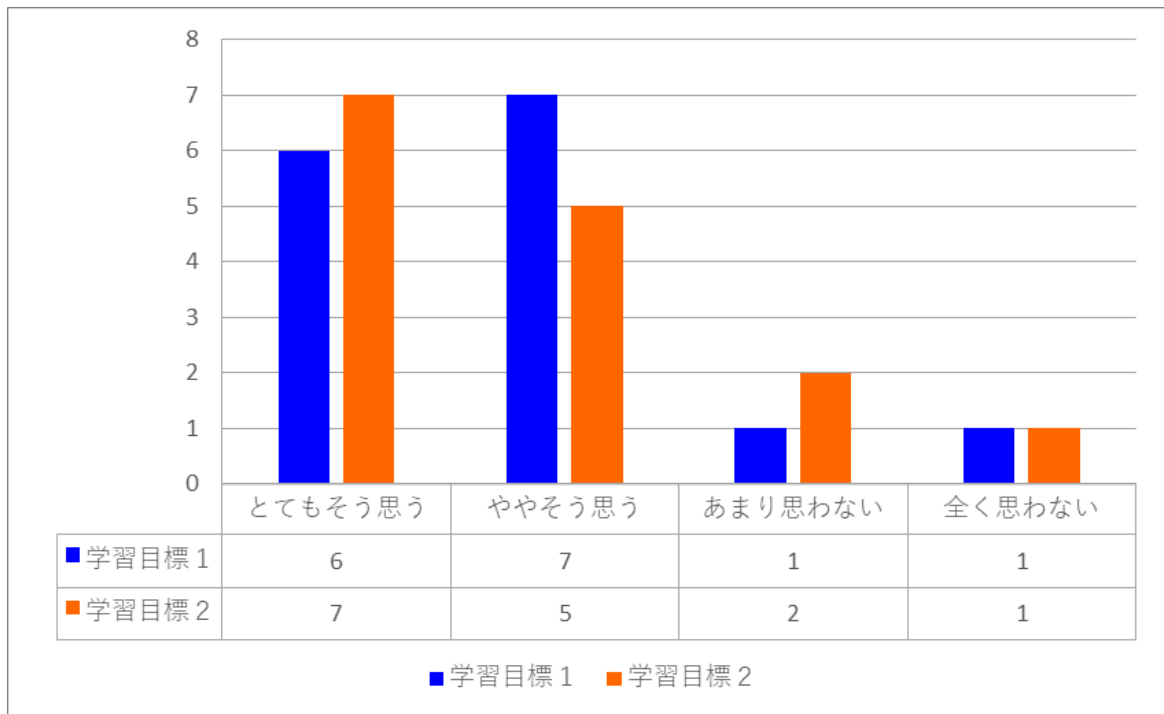
事後アンケートにおいて、各講座で掲げた学習目標1および2の達成状況について受講者に回答を求めました。アイデアワークショップ編では、「とてもそう思う」「ややそう思う」との回答がいずれも88%台を記録し、ハッカソン編においても、学習目標1および2の達成状況が「とてもそう思う」「ややそう思う」とともに80%台という結果でした。

今年度は、基礎を固めるアイデアワークショップ編と実用を目指すハッカソン編の2種類に分けて実施しました。昨年度は講座が1種類のみで、学習目標2に「自分が普段から関わる実務的なタスクに、LLMが持つ処理能力を活用することができる（活用のアイデアを出すことができる）」という目標を掲げていましたが、達成度は65%にとどまっていました。しかし今年度はいずれの講座においても、高い達成度を示す結果となりました。

以下に、学習目標1および2の到達状況に関する回答結果を提示します。



図：アイデアワーク編学習目標の到達状況（2025年度）



図：ハッカソン編学習目標の到達状況（2025年度）

2024年12月14日に開催したGSIS-LT 連続WS（第7回）「Moodle4.5標準の生成AI機能と拡張」で使用したコンテンツを非同期オンライン講座化しました。プラットフォームにはUdemyを利用し、2025年1月より無料講座として提供を開始しています。2026年3月6日現在で、87名の受講生が登録しています。

ITとソフトウェア > その他のIT・ソフトウェア

Moodle4.5標準の生成AI機能と拡張

GSIS-LT 連続WS7

新規 5.0 ★★★★★ (3件の評価) 50人の受講生 43分のオンデマンドビデオ

作成者: 敏博 喜多

日本語 日本語

コースへ移動

学習内容 コースの内容 レビュー 講師

- ✓ Moodle4.5での生成AIを利用した文章生成、画像生成、コンテンツ要約の基礎的な機能を知る
- ✓ 実際のMoodle4.5サイトでの生成AI機能の利用方法がわかる
- ✓ Moodleでの生成AIサービスのAPIキーの設定方法がわかる
- ✓ Moodleプラグインによる小テスト問題自動生成の機能を知る

図：udemyのコースMoodle4.5標準の生成AI機能と拡張
[\(https://www.udemy.com/course/moodle45ai/\)](https://www.udemy.com/course/moodle45ai/)

実践事例集の公開

これまでに実施したワークショップや研究会で提供した学習コンテンツや資料は、基本的にMoodle上で誰でもアクセスできるよう、「実践事例集」として公開しています。

教育支援ツール活用のための実践事例集

ダッシュボード / コース / 2021_moodle活用 / Moodle

事例一覧 Moodle Zoom 全体

本ページでは2021年度に熊本大学教授システム学研究センターが提供したワークショップを元に、MoodleやZoomといったICTツールの活用に関わる情報を掲載しています。興味があるものをご利用ください。

Moodle編

自動採点テストで独習させたい【Moodle】

小テストの設定方法やランダム化について解説しています。

サンプル有

アクセスする

学生相互のやりとりで学習させたい【Moodle】

提出物が全員に見えるようにし、相互にコメントを書かせる方法等について解説しています。

アクセスする

学生の状況をモニターしたい【Moodle】

学生の出席（Moodleコースに入ったか）を確認する方法等について解説しています

アクセスする

Zoom編

Zoom講義中に問いかけて反応を見たい【Zoom】

提出物が全員に見えるようにし、相互にコメントを書かせる方法等について解説しています。

アクセスする

ラーニングテクノロジストの育成

教授システム学専攻は2022年度より、ラーニングテクノロジストを育成するカリキュラム（博士前期課程）を提供します。詳しくは以下のリンク先でご確認ください。

- 教授システム学専攻：博士前期課程カリキュラム
- 教授システム学専攻：ラーニングテクノロジスト詳細

Moodleの利用方法をもっと知る

以下のサイトでは、このページで紹介しているMoodleの利用方法について、より詳細に情報を掲載しています。

- 熊本大学：eラーニング推進室
- Moodle公式ドキュメント

図：教育支援ツール活用のための実践事例集

各トピックの説明ページ例は、下図の通りです。小テストの種類や作成方法といった一般的な情報だけでなく、「毎回違う問題を出題したい」や「複数の小テストの総合点を出したい」など、より高度な設定についても説明しています。

さらに、自組織のMoodleヘリストア（ファイルをアップロード）するだけで、設定済みの小テストを導入できるサンプルをいくつか提供しています。これにより、自力での設定が困難な方でも、機能を活用できる仕組みを提供しています。

また、ツールの活用方法に関する説明だけでなく、これまでに提供してきた教育改善スキル修得オンラインプログラムで紹介されている学習コンテンツなど、機能と関連する学習設計の観点からも役立つ情報を参考情報として掲載しています。

教育支援ツール活用のための実践事例集

ダッシュボード / コース / 2021_moodle活用 / 学習活動設定編

[事例一覧](#)
[学習活動設定編](#)
[学習活動評価編](#)
[全体](#)

自動採点テストで独習させたい【Moodle】

概要

Moodleでは、「クイズ」機能を利用して、知識やスキルを習得できるまで、学習者に練習をしてもらうことができます。以下にクイズの形式の説明、サンプルを掲載していますので、ご利用ください。

小テストの種類や作成方法：

小テストに関連する設定：

いくつかの小テストなどの点数を積み付けして、総合点を出すには⇒「評定」の評定項目に「計算」を使うのが分かります。自由に計算式を書いて、総合点に対する配点（積み付け）の調整ができる。

サンプル：自身のMoodleへリストア（挿入）できます。リストア方法はこちら

実用イメージと参考情報

クイズ機能を利用することで、例えば、「（１）授業の前にLMS上で学習し、クイズに合格することを授業参加のための条件とする」や「（２）3回の授業ごとにテストを行い、授業についていけない学習者をフォローする」といった利用方法が考えられます。詳しくは以下のリンクをご参照ください。

【参考】教育改善スキル修得オンラインプログラム「科目デザイン編」モジュール3

このプログラムでは、何度でもテストにチャレンジできる「再チャレンジ可」や、授業を学習目標ごとにブロック化するかし、ブロックごとに学習目標の達成をチェックする「多段階評価」を提案しています。

ラーニングテクノロジストの育成

教授システム学専攻は2022年度より、ラーニングテクノロジストを育成するカリキュラム（博士前期課程）を提供します。詳しくは以下のリンク先でご確認ください。

- 教授システム学専攻：博士前期課程カリキュラム
- 教授システム学専攻：ラーニングテクノロジスト詳細

Moodleの利用方法をもっと知る

以下のサイトでは、このページで紹介しているMoodleの利用方法について、より詳細に情報を掲載しています。

- 熊本大学：eラーニング推進室
- Moodle公式ドキュメント

図：教育支援ツール活用のための実践事例集（例：自動採点小テストで独習させたい）

2026年3月31日

コンテンツ制作：

熊本大学 半導体・デジタル研究教育機構 教授システム学教育実践力開発拠点

監修者：

喜多敏博（半導体・デジタル研究教育機構 教授）

編集担当者：

山下藍（半導体・デジタル研究教育機構 特任助教）

篠塚麻衣子（半導体・デジタル研究教育機構 特定事業研究員）